

DEW
stream 2019

Planning, Design, and Consulting
SHIMIZU CORPORATION

vol.79

02 - 05	渋谷ソラスト
06 - 09	かみす防災アリーナ
10 - 13	ANAインターコンチネンタル別府リゾート&スパ
14 - 15	浦和明の星女子中学・高等学校 カフェテリア棟
16 - 17	日本女子大学図書館
18 - 19	ノーガホテル上野
20 - 21	ヤマダヤ本社
22 - 23	島津製作所 W10号館 ヘルスケアR&D センター
24 - 25	東京都看護協会 会館
26 - 29	岩手医科大学附属病院
30 - 31	大本山永平寺「親禪の宿」柏樹閣
32 - 33	西新井大師総持寺 山門
34 - 35	キオクシア岩手 510棟
36 - 37	長崎カステラランド
38 - 39	魚沼醸造株式会社 水の郷工場
40 - 41	中部国際空港 第2ターミナル
42 - 43	早稲田大学 37号館 早稲田アリーナ
44 - 45	秋田放送新社屋
46 - 47	サンノハシ本社
48 - 49	JAグループ アグベンチャーラボ
50 - 51	TOTOインドネシア本社
52 - 53	イソラス チカラン
54 - 55	東急メガクニンガンプロジェクト
56 - 57	安田町新庁舎建設事業
58 - 60	作品アーカイブ委員会一覧
61	組織表

DEW
stream 2019
ひとりひとりのDEW、それぞれの想い
— 近作プロジェクトを通じて —

vol. **79**

街に開かれたクリエイティブ・ワークプレイス

— 緑あふれる様々な居場所づくり —



中村 讓	意匠設計	1996年入社
川口 学	電気設計	2004年入社
中本 俊一	設備設計	2005年入社
藤原 寛	意匠設計	2006年入社
佐藤 宏	構造設計	2011年入社
馬 暁川	意匠設計	2016年入社

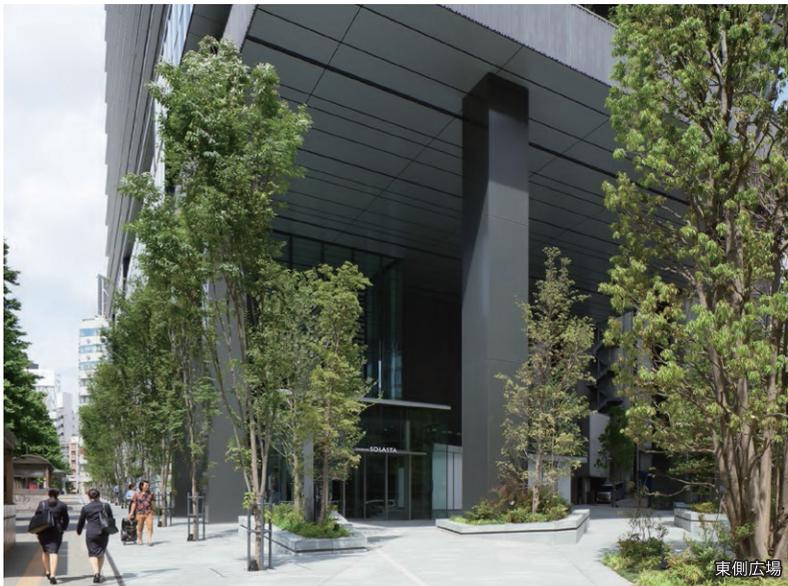
SHIBUYA SOLASTA
 渋谷ソラスタ



全景 渋谷駅方面を見る



西側外観



東側広場



2Fエントランスホール

竹中(D・E・W)：渋谷ソラスタで設計担当された意匠・構造・設備・電気設計の方々に集まってもらいました。この場を借りて、この建築がどのように実現したかをお聞きしたいです。

施主の強いこだわりに応える

中村：このプロジェクトは渋谷駅の西、「渋谷」の坂の上の大規模オフィスです。超高層でありながら、各階で外に出ることの出来るグリーンテラスをはじめとして、外部との接点を積極的に取り組む計画です。執務室以外でも仕事のできる豊かなサードプレイスの提供と100Tの活用により「クリエイティブな働き方をつくる」ことをテーマとしています。

川口：お施主さんは新しいものにも敏感で、設計・監理中にもどんどん先端技術を取り入れていく姿勢を持っておられました。100Tを用いて、ワーカー同士の位置情報をリアルタイムで確認してコミュニケーションの活性化をはかるなど、新たな挑戦を続けたため、メーカーとの打合せを重ねて通常の案件ではできない経験ができました。

中村：また当時入社3年目の馬さんと一緒に内装計画を進めました。彼女にとっては初めての経験で、毎日毎日粘り強く検討を行ってもらいました。

馬：私は内装計画を中心に担当しましたが、今まで経験した中で一番大きな案件でやりがい大きい反面、苦労した部分も多かったです。カラスキームの提案では、カーペットや壁紙、タイルなど、様々な建築製品の知識が必要で、毎日色々な材料を各方面の業者から取り寄せ、実際に触って比べて、同時にCGでも検討し、奮闘しました。中村さんに指導頂きながらも、最後までやり遂げられたことは今後の財産になると感じています。

中村：大規模案件であることから行政関連の業務も相当なパワーが必要となり、

藤原君が根気強く対応してくれました。

藤原：私は2年間専従で担当させてもらいました。計画変更、総合設計などの申請や検査対応は非常にボリュームがありました。工程がスムーズに進むように常に最善を尽くしました。また、お施主さまが納得するアウトプットのために、また社会が評価する作品づくりのために、チームや現場と議論し費やした時間は非常に濃密な時間で、あつという間に過ぎ去りました。建物が竣工した時に味わった感動はきっと忘れることは出来ないのと、この案件に関われたことに感謝しています。

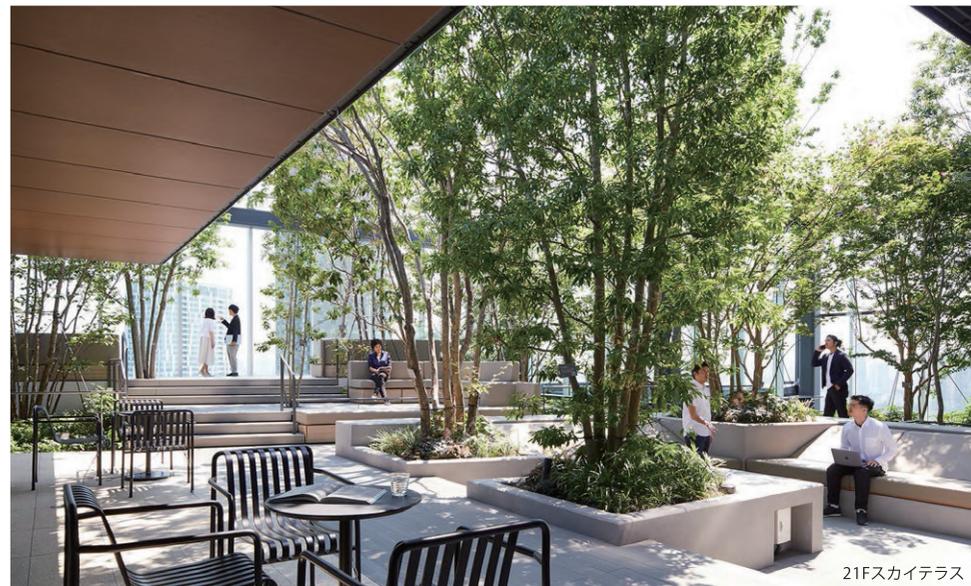
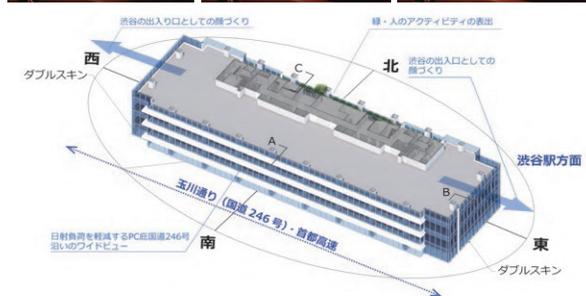
拡がりと呼びのある

オープンスペース

中村：建物のエントランス空間は外部と繋がるよう、渋谷の地形に沿って、訪れた人が自然と2階のエントランスホールに導かれるよう計画されています。ここでは構造設計の佐藤くんに力を発揮してもらいました。

佐藤：私は入社5年目からの丸4年間、このプロジェクトを担当していました。そのため建物全体に対して思い入れはとても深いのですが、その中でもこのエントランス部分にある大きな階段は特別な思いがあります。これは地震時に1階と2階で変形差があるため、構造的に縁を切る必要があるのですが平坦でなく階段状の場所であったこと、そして同時に上部の外装材の荷重を支えるという条件があり、非常に苦労しました。意匠設計と協力し、接続部ができるだけ自然に見えるよう石目地の中をミリ単位で調整しました。難しい納まりになったため、施工中にも階段が揺れないか、外装との取合いに問題がないか、毎日のように確認しに行っていました。

中村：また、足元のコアを最小化することで東西にまとまりのある広場空間をつくり、ワーカーに居場所を提供するだけでなく、周辺環境と呼応する歩行者ネットワークを構築しています。敷地東西に設けられた広場やカフェが新たな賑わいを生み出し地域に貢献することを期待しています。



佐藤：意匠設計が描いた、エントランス廻りの迫力ある吹抜を実現するためにギリギリまで検討を行いました。125mm×75mmの細い柱を風除室のオートドアの枠内で隠れるように設計し、当初ファブにもできないと言われたものを現場に通い続けて実現させています。

どこん詰めた照明計画

中村：2階のホールには南に面した長大なガラススクリーンと明るい壁面のエントランスが人々を迎えます。人の生態リズムを考慮した調色調光システム「サーカディアン照明」を導入して、体に優しい空間を目指しました。電気設計の川口くんとは多くの検証を重ねました。

川口：そうですね。お施主さんのこだわりが非常に強く、ワーカーに対してより良い環境を提供するために細部にわたり、バスターな空間を追求されました。設計者として照明のサイズや色温度を聞き出していきましたが、いざ提案を詰めていくと、実はその理想は日本製の照明器具だけでは対応できず、海外製のものを導入することとなり、国際規格との統合など、良い経験ができました。意匠設計の中村さんと現場と一緒にモックアップ（現寸模型）を作成し検討したり、シミュレーターを用いて照度分布、明るさ感をビジュアルでお施主さんに直観的に伝わるようなプレゼンをしたりと、とことん続けました。入社以来ここまで突き詰めて提案を重ねたのは初めてかもしれません。

中本：お施主さんとのやりとりに関しては、電気設計の川口さんと一緒に理想の電気設備計画を毎週毎週、愚直に探し続けたことが思い出です。提案し続けるうちに、お施主さん側もここまでやってくるのかと認めてくれるようになりました。最後はお施主さんも併せて一つのチームのような一体感がありました。また、意匠設計の中村さんの熱量と責任感には非常に刺激をもらいました。意匠・構造・設備・電気設計のメンバーでSNS上にグループをつくり、忙い中でも、とにかく情報の共有に努めました。密度の高いやりとりを重ねた結果、フォローし合いながら進めていった、という印象です。

プロジェクトの中の喜び

佐藤：この現場は杭を打ち始めた時から毎日見守ってきたので、鉄骨が立ち上がっていった時は感慨深かったです。建物がまさに成長していくようでした。特に1m角、高さ15mの長柱が立ち上がった時のスケールの大きさと緊張感は忘れられません。その構造体としての緊張感を仕上げを決めていく意匠設計に託しました。お施主さんとも時間を重ねていくにつれて距離が縮まり、「かつこよくなってきましたね」と声をかけてもらえた時は充実感がありました。

中村：改めて振り返ると、この案件は熱心な人たちが多かったです。もの決めの打ち合わせは、夜までずっと続きました。お施主さんも、私たち設計者がこんなに頑張ってくれているのだから、と徹底した姿勢で挑んでくれましたし、設計者である僕らは、常に高いレベルの決断力がある熱心が一体となって建物が生み出されていきました。ここにいる設計チームに加え、熱心なお施主さんと現場の人たちと出会えたこと。そして、その思いが建物のあらゆるところに込められている。そんな仕事ができることに大きな喜びを感じています。

「もしも」のときも「いつも」のときも —異なる価値観の融合により実現した市民の居場所—



重松 英幸 意匠設計 2006年入社

KAMISU BOUSAI ARENA
かみす防災アリーナ

大内逸平(D.E.W.)：かみす防災アリーナは、平常時「いつも」はスポーツ文化の活動を通して市民が交流し賑わい、災害時「もしも」は一人収容可能な避難施設となります。平常時の賑わいが災害時の助け合いにつながるように空間や仕組みづくりを行いました。建物は2階建てに高さを抑え、大小のアリーナやホール、ホールを並列配置することで、様々な世代の出会いの創出、隣接する防災公園との連携のしやすさを実現しました。防災公園とのインターフェイスであり各用途の結節点でもある「コミュニケーションコリドー」は、可動家具や植栽により様々な人の居場所になるよう計画しました。木立をイメージした立柱と、広い間口の縁側空間により公園と一体となった賑わいデッキは、市民が集う憩いの場となります。建物側の賑わいを表出させると共に、公園に今まで無かったアクティビティ（食事をする、日陰で休む、公園を眺めるなど）を建物側が補完し公園との相乗効果を生み出します。

スポーツ・文化で賑わう 市民の憩いの場



南西外観 いつも：スポーツと文化という異なる用途を並列させ、170mの大庇下におさめることで様々な居場所や出会いを生み出した
もしも：日頃の人と人とのふれ合いが災害時の人と人との助け合いにつながる施設となる

重松：かみす防災アリーナは、平常時「いつも」はスポーツ文化の活動を通して市民が交流し賑わい、災害時「もしも」は一人収容可能な避難施設となります。平常時の賑わいが災害時の助け合いにつながるように空間や仕組みづくりを行いました。建物は2階建てに高さを抑え、大小のアリーナやホール、ホールを並列配置することで、様々な世代の出会いの創出、隣接する防災公園との連携のしやすさを実現しました。防災公園とのインターフェイスであり各用途の結節点でもある「コミュニケーションコリドー」は、可動家具や植栽により様々な人の居場所になるよう計画しました。木立をイメージした立柱と、広い間口の縁側空間により公園と一体となった賑わいデッキは、市民が集う憩いの場となります。建物側の賑わいを表出させると共に、公園に今まで無かったアクティビティ（食事をする、日陰で休む、公園を眺めるなど）を建物側が補完し公園との相乗効果を生み出します。

木鋼ハイブリッド材

重松：メインアリーナのアーチトラスとコリドーの屋根架構には茨城県産杉の集成材で構成された木鋼ハイブリッド材を採用し、構造体の耐力向上に寄与しています。純粋な木造とした場合、断面が大きく不経済となることから、鋼材を木材で補強する事で大スパンの木質空間を実現しています。木材利用により、平常時災害時共に安心感を与える落ち着いた空間とすると共に、公園の緑や木との繋がりをより強めています。



コミュニケーションコリドー
いつも：市民の居場所として賑わう
もしも：地域防災拠点として機能

「いつも」の快適は 「もしも」の機能維持へ

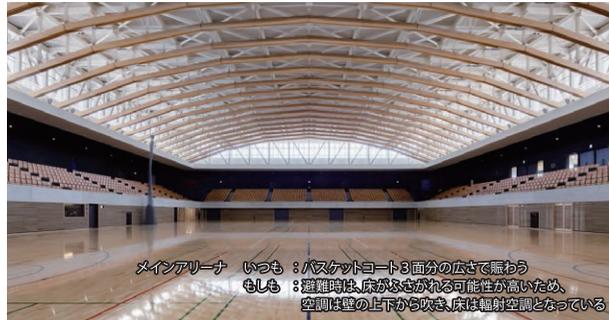
重松：災害時の利用転換（ボール水を生活水に活用、雨水貯留槽を緊急排水槽へ転用等）を考慮した計画としています。平常時は快適で省エネルギーな環境、災害時は環境維持という2つの機能を併せ持つよう、ハイサイドライトによる自然採光、敷地の風向を活かした自然通風、水を利用した屋根散水といった自然エネルギーの活用を行っています。

「もしも」のための 「いつも」の仕組み作り

重松：計画段階から防災施設となることを想定しているため、運営・維持管理、学術的な知見も盛り込み実状に沿った、活きた避難マニュアルの作成も行いました。また、仮囲いを活用した市民とのコミュニケーションや移動家具を使ったワークショップを開催し市民に愛着を持つってもらう工夫をしました。今後もコリドーの家具を活用したワークショップや防災に関する講演会など随時行っていく予定です。



鳥瞰 いつも：公園側に大きく開くことで、にぎわいが溢れ出る
もしも：公園の防災機能との連携のしやすさを実現



メインアリーナ
いつも：バスケットコート3面分の広さで賑わう
もしも：避難時は、床が足音が伝わる可能性が高いため、空調は壁の上下から吹き、床は輻射空調となっている



音楽ホール
いつも：300人を収容する音楽ホールは市民のための発表の場となる
もしも：人が横になれるよう肘掛は跳ね上げ式、座面もフラットな椅子を採用



にぎわいデッキ
いつも：木立をイメージした立柱と広い間口の縁側空間により公園と一体となったデッキは、市民が集う憩いの場となる
もしも：炊き出しのスペースとして活用（給排水、電源、ガス対応など）



大内逸平（DEW）：ここからは協働デザイナーである、インテリアデザインを手掛けたFIELD FOUR DESIGN OFFICEの榊さん、家具デザインを手掛けた岩沢兄弟のいわさわひとしさんといわさわたかしさん、グラフィックデザインを手掛けた大内かよさんと、かみす防災アリーナを巡りながらお話を伺っていきます。

車輪とプラコンテナの家具

重松：一万人の避難を想定した一万㎡のスペースを、平常時にも市民の賑わいに寄与するような居場所にしたと考えると、FIELD FOUR DESIGN OFFICEと岩沢兄弟とコラボレーションし、様々な用途の家具を置きました。

いわさわたかし：市民のアクティビティを誘起し、災害時には必要な場所に動かせるよう、全ての家具には車輪を付けています。板と板で挟まれたプラコンテナは家具の構造体でありながら、分解や入れ替えが可能で、家具としての機能を失わないようデザインしています。災害の際には、救援物資の仕分けであったり、様々な形での利用を想定しています。また、プラコンテナ自体が物流の規格サイズで作られているので、入手が容易で、パーツの追加が可能なことも重要なポイントです。

榊：家具デザインはコラボレーションしながら行いましたが、誰がどこまでやったのか曖昧になったのが面白かったです。これ誰のアイデアだったかって。フランクな意見交換ができる関係性を築けたことが、良い空間づくりにつながったと思います。

いわさわひとし：設計時から市民に対して、実寸大のプロトタイプ家具を使ったワークショップを実施しました。子供がコンテナを持って公園を走っている姿を見て、新しいコミュニケーションが生まれる予感が出て、これはいける！という感覚をチーム内で共有することができました。

重松：ワークショップは建築が完成してからでも継続してやっていく予定です。この使い方は良いけど、これは良くないな！など、市民の方々が家具の活用方法を生み出していってもらえるプロセスを継続して歩んでいきたいです。

グラフィックウォール

重松：170Mの廊下に向する巨大な壁面を、市民が親しみを持てるようなデザインにしたいと考え、茨城県出身のOKデザイン室の大内かよさんとコラボレーションしました。

大内かよ：施設全体のデザインコードは、「木立や「木漏れ日」です。サインデザインでは神栖市の豊かな自然を象徴する「光」と「水」を記号的に盛り込み、鹿島灘にみられる広い海、そこから立ち上がる朝日のピクセル画を、アリーナとホールホワイエ部の巨大ウォールに描きました。縦と横、斜めのセグメントで構成された「水」と「光」のピクセルが増幅させることでグラフィックが展開されます。私が描いた下絵を元に、清水建設のコンピュータショナルデザインによるシミュレーションを重ね制作しました。

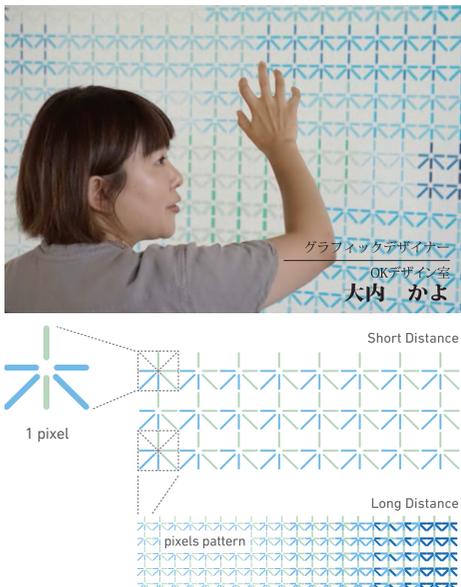
重松：グラフィックウォールは夜間にもきれいに見えるように、照明デザイナーの方と一緒に見せ方を検討しました。廊下全体をホテルライクな落ち着いた感じのある色温度の照明とし、昼間とは表情が一変します。

コラボレーション

大内かよ：色々な観点を持った人とそれぞれの身体性を使って検証し共有することができました。チームだからといって自分の領分を狭めず、相互に関わりながら仕事ができました。

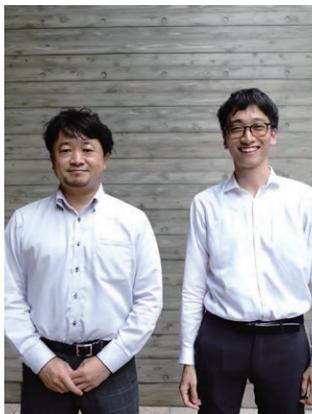
いわさわたかし：家具、グラフィック、照明、防災、それぞれのデザイナーで考えていることが違いますが、対話を続けていくと、みんなの物になっていくのが面白かったです。

重松：今回は設計者の思いのもとに、数多くの方々とコラボレーションしました。常に同じビジョンを共有することを意識し、なるべく打合せは分野別ではなく、皆で行いました。その分最初は時間がかかりましたが、自分たちの専門分野を越境した相乗効果生まれ、市民の方々に親しみを持ってもらえる居場所が生まれたと思います。



世界に誇る唯一無二の温泉スパ&リゾート

— 関係各社との綿密なコラボレーションにより事業を実現 —



石谷 貴行 意匠設計 1998年入社
丸山 亮介 意匠設計 2014年入社

ANA INTER CONTINENTAL
BEPPU RESORT & SPA
ANA インターコンチネンタル
別府リゾート&スパ

絶景をきっかけに事業がスタート

柏木 (DEW) … 本日は発注者である東京センチュリーの大久保様、片瀬様、中村様をお迎えしてお話を伺いたいと思います。まずは今回、別府という敷地にラグジュアリーホテルを新たに計画されていますが、事業の経緯や狙いをまず初めにお聞かせください。

大久保 … 当初は弊社の環境エネルギー部による地熱発電の用地として検討していました。しかし、調査の結果、敷地にある温泉の熱量では発電施設は難しいということがわかり発電事業は中止になりました。ただ、眺望がすばらしかったため弊社の役員からリゾートホテルを計画してみてもどうかという話があり、それが事業のスタートでした。

グローバルリゾートと

温泉カルチャー

柏木 … ホテルのコンセプトや計画の全体像をどのように作り上げていかれましたか。

石谷 … 別府は湧出量、温泉数共に日本で文字通り日本を代表する温泉地ですが、ここに外資系ラグジュアリーリゾートを創るということ。このマッチングを課題と捉え、世界各国からのエリートトラベラーを迎え入れるにあたり「グローバルリゾートとしての設えと「別府温泉らしさ」、その二つの融合を強く意識して設計を進めていきました。

大久保 … 温泉地のホテルでありラグジュアリーなホテルでもあるというのは国内でも例がなく新しいジャンルへの挑戦だったように思います。ホテルブランドのスタンダードを超えた暗黙知の要求を叶えていくために一緒に悩んでいただけ問題解決していったと思います。

別府ならではの物づくりへのこだわり

柏木 … ホテルの各所に地場の素材や伝統工芸によるものが多く用いられていますが、地場のものを使うことに強いこだわりや思いなどがあったのでしょうか。

大久保 … ありました。地域経済けん引事業の第一号案件に登録されたこともあり、行政からも地元らしさを出すことを期待されていました。例えば、竹細工による内装材などは多忙な時期にあった職人さんや県の職員の方になんとかお願いしながら実現させていきました。

石谷 … 設計者としては、地場の材料をよりナチュラルに見せることに気を使って取り組みました。例えば、エントランスの庇に用いる大分県産の「日田杉」は無垢でかつ節や色ムラのあるまま用いることでよりビュアな状態をお客様に見ただくことを意識しました。露天風呂に用いる石には、別府石を苔の生えた無垢のまま用いているのですが、それも同じ狙いです。

丸山 … 露天風呂の施工の際には、現場の協力により職人さんと直に石の配置や大きさについて議論しながら決定していきました。まさしく設計施工ならではの物づくりの形だと思えます。

石谷 … インテリアについてもデザイナーの橋本夕紀夫さんの思いが詰まっており、建具や家具に別府らしさがふんだんに組み込まれています。そのようなみんなの思いがこもったディテールが随所にある。一方で室内でも別府に來たと感じられる不思議な体験ができるように思っています。また、それが当初からみんなで狙っていた事でもありました。

妥協ない到達点を目指して

柏木 … このプロジェクトには非常に多くの立場の方が関わっていますが、意見調整は具体的にどのようになされた課題を解決していかれたのでしょうか。

大久保 … それは石谷さんが総合プロデューサーとして尽力されたおかげだと思います。実際にデザイナーを初めて、多くの要望があるなかで、安全や品質、



工芸やアートが散りほめられる温泉ラウンジ



石の敷き並べ検査風景



30年程覆かした巨石群で構成した露天風呂。杉ルーバーを用いた傘状の目隠し屋根が独特の風景を形づくる。



温泉からは雄大な別府湾を臨むことができる。



シンメトリーな構成が印象的な大浴場



客室よりプールサイドを望む



敷地は高台の好立地。既存建物を活用した共用棟を、客室を中心とした新棟が挟む建物構成。



大分県産「日田杉」、別府産「別府石」といった地元の材料で構成されたメインの車寄せ



別府特産の竹細工が印象的なエントランス



改修前



改修後



九州の名工の手によるグラフィカルなヒノキ格子が特徴的な客室



コストの観点からどこまで可能かを見極めるノウハウはさすがスーパージェネコンの設計部だとほんとに頼りにしていました。

石谷：一流の方々がチームとして良い方向へ向かっていくために、お客様のサポートは非常に大きかったと思います。すべての部分が色々な人の協議により成り立っていて妥協のない到達点になっており、プロジェクトの完成度に貢献していると思います。

丸山：一流のコンサルタントの方たちが集まっているなかで、それをどのようにハーマイイズ「協奏」させていくかを我々は任されていたような気がします。

カスタマーエクスペリエンスの最大化を目指して

柏木：設計者としてホテル商品企画上注力されたのはどのような点でしょうか。

石谷：お客様が体験する「一つのシーン」をしっかりと意識し商品企画上どうするかをお客様やインテリアデザイナーと一緒に常に考えながら丁寧に作り込んでいきました。まず、お客様が訪れてはじめて目にするエントランスでは「何か新しく何か驚くもの」として庇のデザインを重要視し、次に訪れるエントランスホールでは「フオレスト」というコンセプトを基に浮遊感のあるディテールを作り込んでいます。また、湯けむりが立ち籠める別府の街並みや、眼下に広がる雲海を見たり、感じたり、時には混じり合ったりできる様に、各機能空間の性格に合わせてガラスの支持方法や建具を最適化しました。そのようにして、常にカスタマーエクスペリエンスを意識した空間を考えて計画を進めていきました。

既存建物を効果的に活用

柏木：既存の建物を活用されていますが、理由をお聞かせいただけますでしょうか。

大久保：事業開始当初は、コストの面から既存建物を活用することを考えていました。その上で石谷さんに既存を活かしたプランを複数案検討してもらい、現在の計画で進めることに決まりました。既存を利用することで削減されたコストをエントランス等を使うなどコストコントロールも石谷さんと共に考えていくことで効果的なバリューエンジニアリングになったと感じています。また、既存建物という制約があったからこそ計画がより面白くなったと思います。何もない更地であればもっと普通の四角い計画になっていたかもしれないですね。

別府の活性化に貢献

柏木：このホテルが街に与える影響はどういったことだと思いますか。

大久保：ホテルのオープンを迎えて雑誌やテレビ等の多くのメディアに取り上げていただき地元でも話題の物件になっていると感じています。建物の規模や立地からも良く目立つため建設中から地元の方の期待は大きかったように思います。また、別府市からは街全体を起していく一つの要素となって欲しいと、非常に大きな期待をされていました。現在、実際に当ホテルで働いているスタッフの約6割が地元の方です。特に海外からの留学生が語学能力などを活かして日本のラグジュアリーホテルで活躍しているところが印象的でした。留学をきっかけに日本の文化や別府の街を好きになり、卒業後もスキルを活かして働く場所となっていることを嬉しく感じています。そのような観点からも別府への貢献度は大きいと考えています。

シミズ的设计部に期待

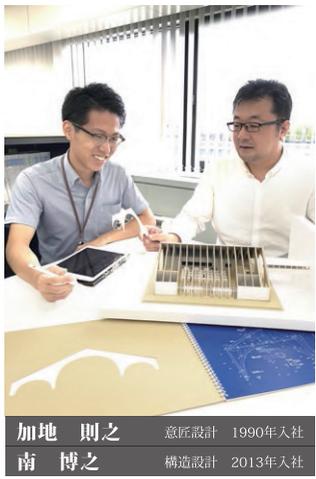
していたこと竣工後の感想

柏木：計画当初シミズ的设计部に期待していたことと竣工を迎えての感想をお聞かせください。

大久保：計画の当初からシミズさんには是非お願いしたいと考えていました。もちろん、見積もり結果に左右されることはありませんが、やはり、スーパーゼネコンの設計部として総合的にプロジェクトをまとめていく力を非常に期待していました。実際に、シミズさんをお願いすることになり設計部の方をはじめ、現場の方々を含めた総合力でプロジェクトを進めていただき感謝しています。次回計画についても是非シミズ的设计部、石谷さんのチームをお願いしたいと思います。

想いをつなぐ『みんなのイエ』

— 簡素で豊かさのある空間を求めて —



加地 則之 意匠設計 1990年入社
 南 博之 構造設計 2013年入社

URAWA-AKENOHOSHI GIRLS' SENIOR AND JUNIOR HIGH SCHOOL, CAFETERIA
 浦和明の星女子中学・高等学校、カフェテリア棟

帰る場所 — 「みんなのイエ」

優しくて華美ではない場所を
 始まりは理事長を務められていた
 小野寺先生からの「女性教育の場として
 優しい空間が欲しい。でも華美なものには
 したくない。」というお話でした。鉄骨造
 の計画に疑問を感じ、木造の可能性を
 検討し始めるきっかけとなりました。

女子中学・高等学校のカフェテリアの
 建て替えます。計画に対し、島村校長先生
 (現理事長) から、「卒業生が帰ってきた」
 と思える場所に」という強い要望があり
 ました。生徒にとってカフェテリアは、
 教室を離れリラックスできる場であり、
 放課後に友達と一緒に勉強する場所です。
 この風景は、この学校を巣立つ生徒たち
 の心象風景となります。そうだった時、
 どんな風景がいだらうか。そして、
 そこはどんな体験を生み出す場所がい
 だらうか。「みんなのイエ」をコンセプト
 にしました。

新しい架構の構想

はつきりした目的がなくても立ち寄れ
 る場所。誰に対しても開かれた場所。様々
 なイベントが起るような場所を目指し
 ました。大きな空間が必要と考え、様々な
 架構についてスタディを続けました。その
 中でも気を付けたのは、力強い構造表現
 や、木肌の美しさを殊更に強調したもの
 にはないことです。軽やかで柔らかな
 しかし簡素な架構。アーチ型に切り抜い
 た板を建て並べた様をイメージし、単純な
 構面が連続する、大きく豊かな内部空間
 を構想しました。

木造ならではの軽やかな架構を目指し、
 105mm幅の樹状方杖架構の両面に9mm
 厚の構造用面材を釘留めした総厚123mm
 の薄い木質アーチとしました。また、
 この構造用面材には素朴な質感をもつ
 MDF板を現わして使いました。

経済性と施工性

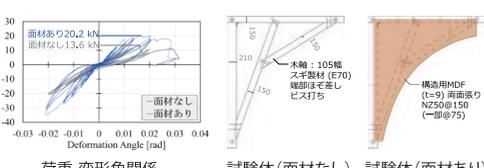
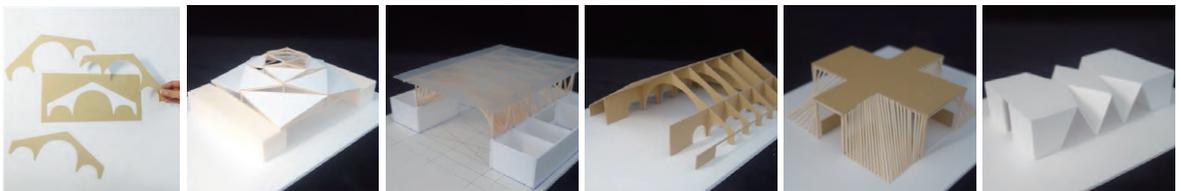
一般流通材を利用できるように、主な使
 用木材を断面寸法：105×105、
 240、長さ：6m以下、等級：E70の
 スギ製材で設計した結果、加工工場や建
 設地に近い福島・茨城・栃木の県産材を活
 用することができました。加えて、プレカッ
 ト加工可能な仕口(短ほぞ)と既製金物
 (構造用フルスレッドピス)による簡明な
 接合とし、経済性と施工性を向上させて
 います。

実験による構造性能の確認

方杖架構の水平抵抗特性および面材
 張りによる影響を把握するために、実架構
 の一部を模した試験体の水平加力試験を
 行いました。その結果、方杖架構に期待
 した水平抵抗特性を確認でき、また、面材
 張りにより初期剛性が1.9倍、終局耐
 力が1.6倍になることがわかりました。
 さらに、面材ありの構造特性係数 D_s = 0.53
 等を考慮すると、建物全体で必要保有
 水平耐力の1.3倍の耐力を有する
 と計算できます。

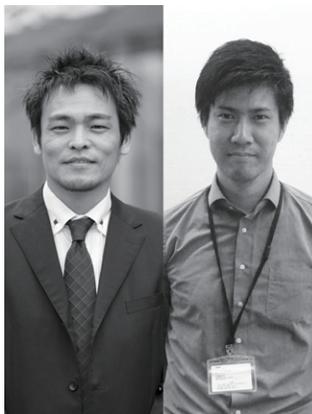
任意形状の木軸に面材を組み合わせる
 架構システムについて、接合部破壊特性
 の更なる検証実験と解析評価・設計手法
 の開発を進め、経済的で作りやすく、より
 自由な形態の木質構造を実現する可能性
 を拡げていきたいと考えています。

(加地・南)



複雑な構成をシンプルにつくる

— 模型や現寸モックアップでの検証を通じたものづくり —



根岸 健一 意匠設計 2000年入社
一万田 知宏 意匠設計 2014年入社

JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY
LIBRARY
日本女子大学図書館

『VISION120』
本案件は日本女子大学の「VISION120」と呼ばれる120周年記念事業の一環として計画されたものであり、1期工事として図書館と体育館が整備され、2期工事では120周年を迎える2021年の竣工を目指して教室・研究室棟、新学生棟(厚生施設)の計画が進められている。

「スロープが「ねじれる」

複雑な構成

図書館は中央のフラットな閲覧スペースの周囲をスロープがぐるぐるともわる構成の建物である。地下1階に集密書架を設けている以外は4階まですべて開架書架で構成し、ここにスロープや吹抜けが絡むことで空間に変化が加わるとともに非常に開放感、透明感のある内外観を形成している。

内部空間に変化を与え、外観のダイナミックな印象を形成するスロープはコーナー部で踊場を設けず、内外のスラブ小口ラインをシームレスに連続させているが、これを実現するためにスロープのスラブは三次元的にねじれた形状となっている。結果として取り合うサッシュの長さが一本一本異なるなど、見た目以上に複雑な構成となっており、この複雑な構成を如何にシンプルに造るか、これが最大のテーマとなった。

シンプルに見せる

ディテールの造り込み

スロープとフラットなスラブの取合い部分は、紙がスパッと切れたようなイメージを実現するため、左ページのスケッチのように柱から持ち出しでスロープのスラブを支持している。柱の芯に対して荷重ポイントが偏心するため、構造的にはFEM解析を行い、柱の中間部に作用する応力分布を一か所一か所確認しながらの設計であった。

模型によるイメージ共有

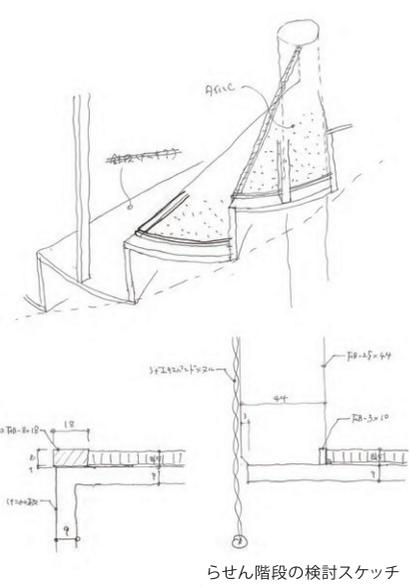
図書館では、直通階段のほかに、2、3フロアを接続する連絡階段が多数設けられているが、階段の見せ方としては、上段写真にあるような鉄板手摺りによるオブジェ的な存在感を持たせた階段や左上写真のように透明感のあるらせん階段など、その場所場所で表現を変えている。

これらの階段の設計では、スケッチにより設計JV内でデザインイメージを共有し、これを1..20程度のスケールで模型化してより具体的にイメージを共有するといったプロセスで設計を行った。実際のらせん階段設計時のスケッチが左上の図であるが、スケッチをベースに詳細図面化するとともに模型を作成し、段部の納まりや手摺の詳細についても一つ一つ検証しながら設計を進めていった。最近では3Dによるイメージ共有が主流になりつつあるが、模型化することにより設計者間だけでなく、施主や施工者へのイメージ伝達にも効果的であった。

(根岸)



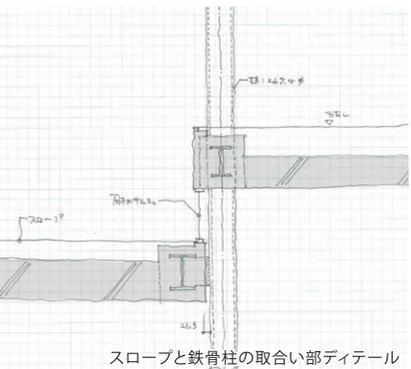
ラーニングcommonsとスロープ



らせん階段の検討スケッチ



らせん階段



スロープと鉄骨柱の取合い部ディテール



スロープ端部の取合い



全景

まちに開かれた豊かな共用部の創出

— 地域と共存するライフスタイルホテルをつくる —



間島 梓	意匠設計	2008年入社
白井 大悟	構造設計	2016年入社
牛山 章子	設備設計	1995年入社
小西 優斗	電気設計	2016年入社

NOHGA HOTEL UENO
ノーガホテル上野

地域とつながるホテル

「NOHGA HOTEL UENO」は野村不動産がホテル事業の第1号として自社で開発から運営までを行うライフスタイルホテルです。
コンセプトは「地域との深いつながりから生まれる素敵な経験」。
地域の文化の魅力を体験できるサードプレイスを低層部に配置しました。

3つのゾーンを 一続きの空間に配置

ゲストが、滞在中のホームとなる居心地のいいお気に入りの場所に出会えるよう、多彩なゾーンを用意しました。日本を感じる露地のようなアプローチ、吹抜を持つメインのロビーギャラリー、ゲスト中心の落ち着いた2階の共用部と、大きく3つのゾーンを設定しました。
そしてこれらを吹抜のまわりに配置し回遊性を持たせることで、異なる雰囲気を持ちながら一体感を感じられるよう空間構成に配慮しました。

コミュニティとしての ロビーギャラリー

ホテルの顔となるロビーギャラリーは、食事をする人、仕事をする人、談笑する人など様々な利用シーンを想定しプランニングしました。調理のライブ感が味わえるオープンキッチンや、吹抜の中心に配置されたビッグテーブルなど、自然とコミュニケーションが生まれる場つくりを特に意識しました。
また気候の良い日は、フルオープンの折戸により、テラスとロビーギャラリーが一体になります。さらに、避難階段を1階部分で大階段とし、テラス側に出すことで、外部にも回遊性を生み出し、立体的な賑わいが、まちに溢れることを狙いました。

まちに開かれた オープンスペース

駅からつながるメインストリートは緑の少ない路地空間でした。まちにも潤いを与え、メインストリートに四季を感じるオープンスペースを設ける植栽計画としました。エントランスアプローチは、紫陽花・野牡丹・ソヨゴなど日本由来の植栽を選定。レストランテラス部分は、「食」にちなんだ柑橘系の樹木やハーブをふんだんに盛り込み、地域の人をレストランに呼び込むきっかけにしたいと考えました。
ホテルの顔になるシンボルツリーは、敷地の角に、樹齢40年以上の造り込みのモミジを配置し、ダイナミックな枝ぶりですぐゲストを出迎えます。

地域の文化の継承

地域の文化を感じられる仕掛けとして、備品やアメニティ、食材・食器に至るまで台東区の職人やデザイナーとのコラボレーションを行いました。
建物に関しても、東上野にアトリエを持つ家紋デザイナーに、ピクトグラムやフォントのデザインを依頼し、サイン計画に組み込みました。さらに蔵前の建築金物デザイナーによるドアハンドルを採用するなど建物内にも地域とのエピソードのある要素を散りばめました。

ゲストやスタッフにより 変化し続ける建物

ホテルという場のつくり込みは、竣工までに完成するのではなく、お客様やスタッフによって、地域と共に変化・成長し続けることが重要であると考えています。地域やゲストに喜んでもらえるホテルをつくる」という同じ目標に向かって、施主・設計者・施工者がお互いの意見を出し合い、試行錯誤を重ねながら最後までこだわってつくった建物が、スタッフやゲストによって様々な賑わいを見せ、地域に貢献し、文化が世界に発信され続けてほしいと願っています。(間島)



ホテルのブランドイメージを仮囲いに表現



事業者・設計者・施工者による試泊時の集合写真



客室サイン現地検討



植栽ポットを並べた大階段



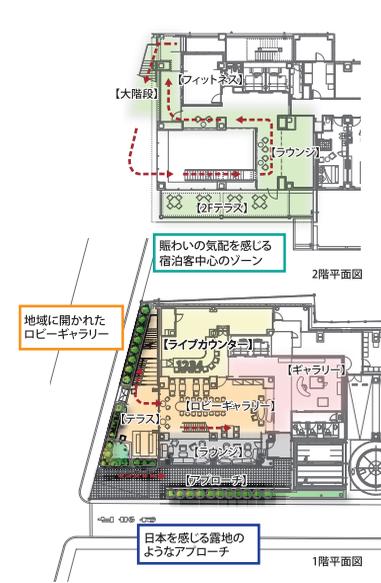
低層部のデザイン検討スケッチ



実際に使用する照明器具での塗装色確認



シンボルツリーの紅葉が出迎えるエントランスアプローチ



地域に開かれたロビーギャラリー

日本を感じる露地のようなアプローチ



2階アラス席



2階ラウンジ



レストランのライブカウンター



ホテルの顔となるロビーギャラリー

時間により見え方が変化する衣服のような外皮

— アパレル業と建築の融合 —



加藤 直樹	意匠設計	2013年入社
稲葉 秀星	構造設計	2009年入社
水井 勇介	設備設計	2011年入社
酒井 浩太	電気設計	2015年入社

YAMADAYA HEAD OFFICE
 ヤマダヤ本社



エントランス・本実PC・エキスバンドメタル



AM4:00



AM10:00



PM13:00



本実型枠PC検査



石検査



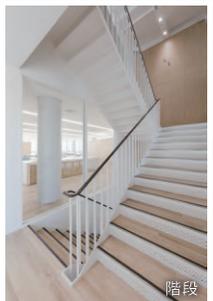
照明実験



エントランス・受付



屋上庭園



階段



9F打合せ室から名古屋城を望む



10F研修ホール



全景

創業126年の女性アパレル業の本社ビル計画。やさしさを感じられる建築を実現したい」という施主の要望をもとに、外装検討をおこないました。

建物は本社としての事務所機能と全国の小売店舗へ商品を展開するための倉庫機能をもつ複合用途です。毎回の定例では社員の働き方やコミュニケーションが生まれやすい空間をどのように創るのか、施主設計、現場が一体になり検討をおこないました。

変化するファサード

やさしさを感じられる建築を実現するために、衣服のイメージを目指し、建物外皮にアルミのエキスバンドメタルを採用しました。

時間の変化によって見え方変わるファサードは動きによって変化する衣服を連想させます。また、エキスバンドメタルは日射を遮蔽しながら風を取り込み、光と風を適切にコントロールする機能を併せ持ち、快適な執務空間を実現しました。

素材からのものづくり

「服作りの原点は糸づくりから」。施主の企業理念に対し、建物もものづくりへのこだわりで応えました。低層部にはコンクリートと杉板の素材感を活かした浮造りの本実型枠PCを採用しました。本実型枠PCを実現するために、アート型枠を採用してモックアップを作成、施工現場と確認作業をおこないました。

石検査では敷き並べ検査を実施し品質の確認をおこないました。

ひとつずつ実物を確認することで品質を確保し、空間の豊かさを実現できました。

多様な空間づくり

働く人がいきいきと働けるような多様な空間づくりが求められました。

エントランスはやさしさを演出するため間接照明としました。階段はオフィスとの一体感を演出するため、耐火ガラスを用い見通しのよい空間としています。

Q. 9・10階には何がある？

9・10階は直天とルーバ天井を採用し他の階とは異なる空間としています。

高層階の北側窓からは名古屋城が一望でき、屋上庭園では休憩やB・B・Qの利用ができるようにしています。

考え続ける

本社ビルをつくるということは大きな家を建てるようなのだと感じました。建物の骨格ができていく毎に客先から新しい要望が生まれ、それに応えるデザインを作成するというキャッチボールを竣工直前まで続けました。

引き渡し当日社員の方々が、とても嬉しそうに笑いながら引越越しをしているのが印象的で、この計画に携わることができてよかったですと感じました。(加藤)

開発スピードを加速させる空間

クライアント・研究者と共に創る設計プロセス



谷 泰人 意匠設計 2009年入社
水田 博夫 意匠設計 2011年入社

SHIMADZU W10
HEALTHCARE R&D CENTER
株式会社島津製作所 W10 号館
ヘルスケア R&D センター

「聞くこと話し合うこと」から
始める設計アプローチ

W10号館ヘルスケアR&Dセンターは、島津製作所のライフサイエンス関連組織を集約し、技術融合と製品開発のスピードアップを図る研究開発拠点です。コンペ時から研究者ヒアリングやアンケートを行い、聞くこと話し合うことから始める設計アプローチを評価していただきました。

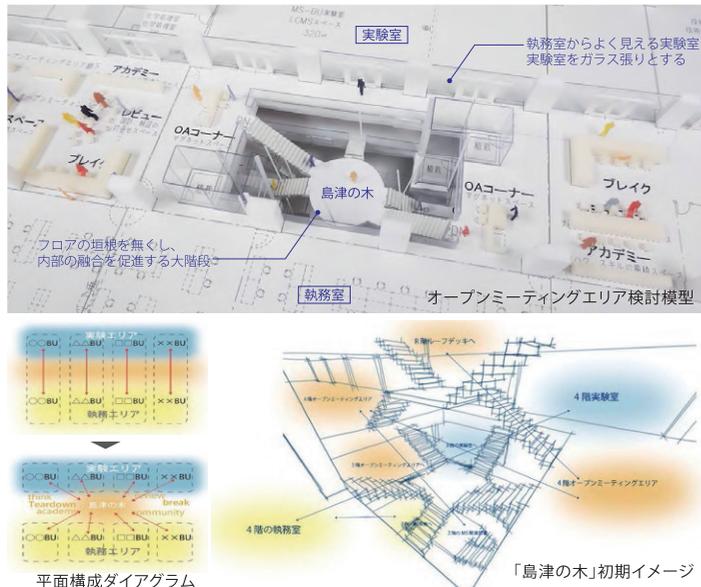
設計段階では、入居するすべての部門に個別ヒアリングを行い、研究者の意見を反映しました。多くの関係者と打合せをし、様々な意見の中から、研究者の働き方、多様なニーズを知ることができました。与条件にはない、島津製作所にとって理想的な開発環境をチームで共有する貴重なプロセスでした。

開発スピードを
加速させる島津の木

平面構成は、オープンな執務室と実験室が隣接し、その間にオープンミーティングエリアと呼ばれる共用部があります。共用部の作り込みにおいて、単なるミーティングスペースではなく、部門ごとの縦割りを解消し、開発スピードアップを促進する空間が求められました。

「島津の木」はオープンミーティングエリアの中央に、階の垣根をなくし、部門をつなげる階段として計画されました。各階・各部門の関係性によって接続方向や密度が変化します。この形は「最短距離で実験室へ行きたい」「スムーズに他フロアへ移動したい」といった研究者の声から生まれました。

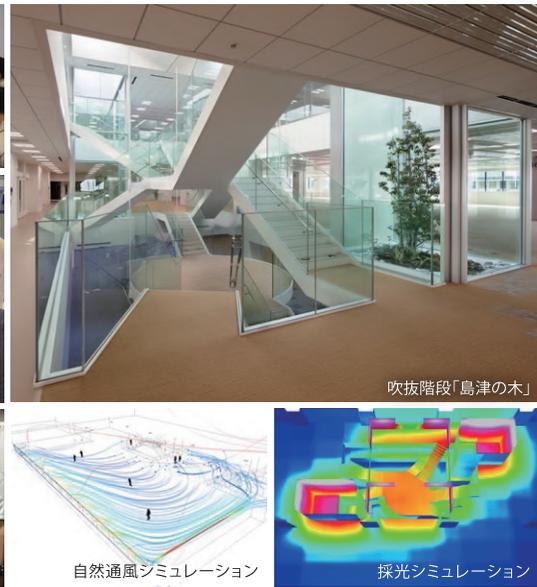
階段まわりの設えについても、開発スピードアップに寄与する場所として必要な機能・行為と重ね合わせて提案を行いました。自然通風・採光シミュレーション等の技術的な検証を行い、研究者の健康に配慮した快適な環境となることを目指しました。



これからの研究施設

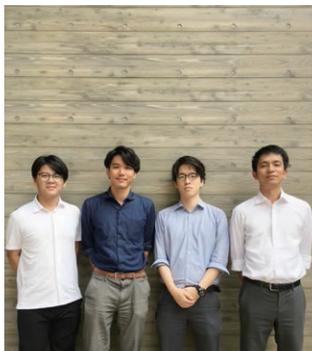
クライアント・研究者と共に創る設計プロセスによって、世界中でここしかない開発環境が実現しました。社内外の研究者と技術融合しながら、ヘルスケア領域において人々の健康に貢献する製品開発を追い求める研究者の姿勢を体現した空間です。

これからの研究施設にとって、多様なニーズに対応し、研究者の個性を反映できる空間がイノベーションに繋がると考えます。ヘルスケアR&Dセンターから生まれる研究成果が、豊かな未来に貢献することを期待しています。(谷・水田)



人々が自然と集う「木漏れ日の下」のような共用空間の創出

— 看護師だけでなく、地域や世代を超えた交流の場を目指して —



上田 昌弘 意匠設計 2004年入社
菅野 貴大 意匠設計 2015年入社
吉沢 形成 意匠設計 2015年入社
赤澤 知也 インテリア 2009年入社

TOKYO NURSING ASSOCIATION
東京都看護協会 会館

交流を生み出す場とは

どのような空間か

今回計画は東京都で働く看護師が会員となる東京都看護協会の新会館設計計画です。協会職員の働く場となる他、看護師への研修や就労支援、両親学級等の子育て支援を行う施設です。設計に際し、埼玉、北海道をはじめとする各地の看護協会をリサーチしましたが、多くの事例が広い敷地に低層の建物という構成でした。

今回は、都市部における限られた敷地を有効に活用しながら積層型の建物を作る必要がありました。その中でいかに利用者間の交流を生み出す空間を作ることができるかが課題でした。

開かれた学びの場と 働く場の立体的コンプレックス

敷地は複雑な形状をしており、接道の大部分がメインアプローチである賑やかな方南通りではなく、静かな細い道路が隣地に接しています。そこで今回の建物は方南通り側にエントランスやコアを、敷地が広い西側に研修室や事務室を設ける、合理的で将来対応を見据えた配置・平面計画としています。また、低層部に来館者も利用するホールや研修室、高層部に協会の事務機能を配置する断面計画としています。パブリックからプライベートへとグラデーションがなる積層型を活かした建築計画としました。

上下階のつながりを生み出す空間を目指して様々な案を検討する中で、西側の整形な広い空間と方南通り側のコアの間に生まれた三角形のスペースを3層吹抜けとし、上下階をつなぐラウンジを設けるアイデアが生まれ、建物の構成が決まりました。

このラウンジは各階に設けるだけでなく各階から少し高さの異なる部分にも居場所を設けることで上下階の距離を縮め、フロアを超えた利用者間の交流を促す計画としています。

吹抜を介してつながる多様な 居場所が人々の交流を促す

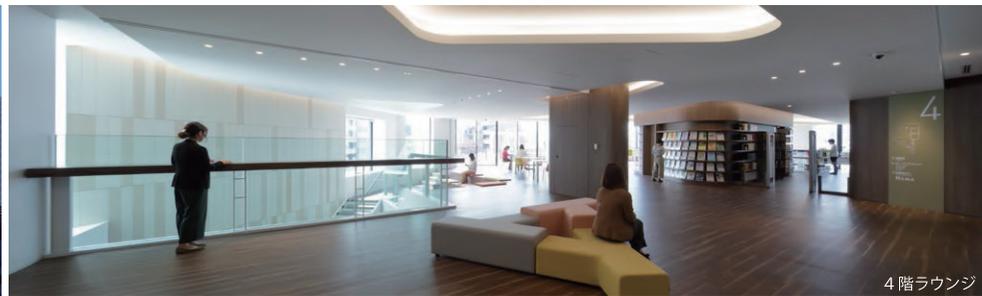
心とは無意識のうちに最適な場所を探る特性を持っています。

共用空間は「木漏れ日が落ちる木の幹」をコンセプトとしたタイル壁のある吹抜けを軸にひとつながりでありながら、多様な居場所を設けました。気軽に座れる家具を配したリフレッシュするエリア、少し籠ることが出来る家具を配し研修に向けて集中力を高めるエリア、階段状のベンチや開放的な図書館、研修生が昼食をとる交流スペース等による利用者同士がアクティブに交流するエリアを設けています。また、吹抜け周りに自然と人が集まるように様々な用途に使用できる手摺と一体のカウンターを設け、一時的な滞在ができるエリアも計画しました。

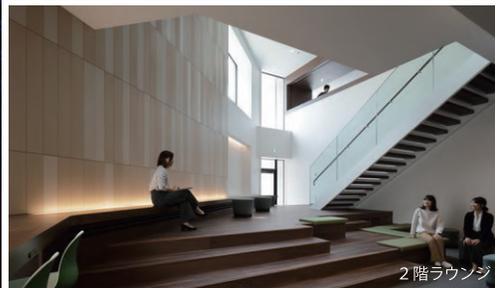
これらのエリアが境界なく、有機的につながることでアクティビティが不均質に分布する状況をつくり出し、利用者が自由に居場所を選ぶことができる空間となっています。

この施設が永く利用者に愛され、看護師の方々だけではなく地域、世代を超えた交流を生む場となることを願っています。

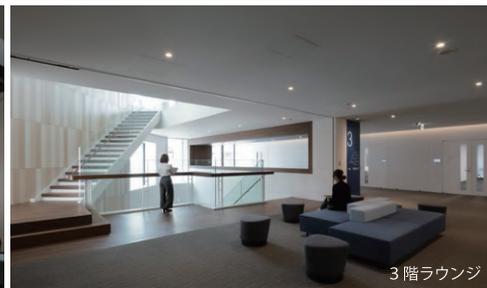
(上田・菅野)



4階ラウンジ



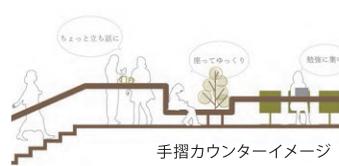
2階ラウンジ



3階ラウンジ



吹抜イメージ



手摺カウンターイメージ



吹抜・ラウンジ | 様々な居場所がつながり、交流が生まれる



外観 | 避難動線、視線制御等の機能と活動の場を併せ持つ外周バルコニーが積層する

「世界に冠たる病院」を目指して

― 岩手の気候・風土に根差した1000床の病院をデザイン ―



榎並	和人 (中央)	意匠設計	1996年入社
秋山	暢大 (左)	意匠設計	2012年入社
伊藤	淳 (右)	意匠設計	2006年入社

IWATE MEDICAL UNIVERSITY
 HOSPITAL PROJECT
 岩手医科大学附属病院

日建設計・清水建設で新病院の
 ためのデザインチームを結成

本計画は、岩手医科大学創立120周年記念事業の一環として進められてきた総合移転計画の最終プロジェクトとなる附属病院移転事業である。最先端の医療に対応した教育や診療を提供していくため令和元年9月に、岩手県紫波郡矢巾にある岩手医科大学矢巾キャンパスに隣接して、高度治療・入院機能を持つ1000床の特定機能病院を新築整備した。

基本設計を日建設計 実施設計・設計監理を日建設計と清水建設で共同設計とし、両社の設計担当者が集う設計室（以下、IMU設計室）を立上げ、設計が進められた。

大学病院を核とした
 「まちづくり」に貢献

本計画は、新病院だけでなく、大学キャンパスを含む総面積34万㎡（東京都1ム7個分の敷地に、保育施設・フードコート店舗・フィットネス棟・ホテルなどが入る。IMU設計室では今回、新病院・保育施設・店舗棟の建築をデザインし、大学病院を核とした全体計画「まちづくり」に貢献した。

岩手医科大学の理念である「医師は患者のそばに」を、新病院の建築計画で実現すべく考案された「ダブルウィング4看護病棟」は、医師が常に患者に寄り添い、より質の高い高度医療を提供できる病棟のデザインである。

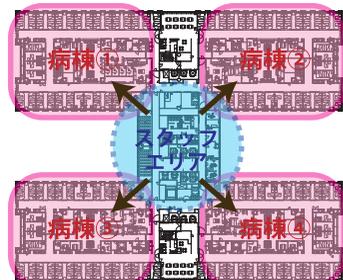
病室は実際の病室を再現したモックアップを作成した。実際のベッドを入れて病院スタッフと使い勝手や家具のレイアウトを検証し、インテリアの色や素材などの物決めを行った。

構造は、ミニスマンモックアップを採用し、最大12.4m×12.4mの無柱空間を実現した。

無柱空間とすることで将来、間仕切変更等の改修においてもフレキシブルに対応できるようにした。また、4床室において



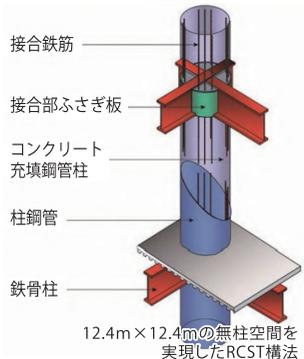
岩手医科大学矢巾キャンパスと1000床の新病院を核としたメディカルタウンプロジェクト



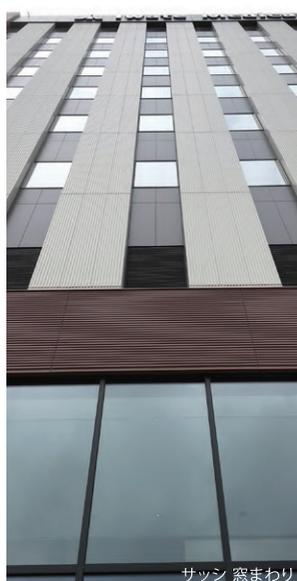
「医師は患者のそばに」を実現した
 ダブルウィング4看護病棟



4床室のモックアップ



12.4m×12.4mの無柱空間を実現したRCST構法



サッシ 窓まわり

では、あえて病室の中央に柱を配置することでベッドサイドのスペースを確保し、ケアスペースの拡大と患者アメニティーの向上を図った。

矢巾地区は、冬季の気温は最大でマイナス17度まで下がることもある寒冷地である。外部と室内の寒暖差は窓に結露を生じさせ、カビの原因となるため、特に冬場に病室の窓が大量に結露しないように、モックアップ等で検証をしながら、サッシ、窓まわりの設計を行った。

岩手の自然・文化を取り入れた
 インテリアデザイン

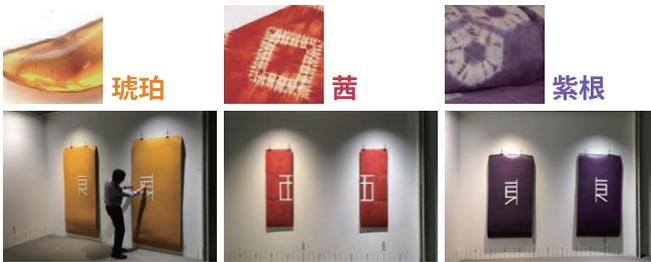
「世界に冠たる病院づくり」として、日本のアイデンティティと唯一無二の価値を世界に示すために、岩手の豊かな山並み、「街並み」そしてそこに集う人々のあたたかい心が作り出す「人並み」をインテリアデザインの基本思想とした。

病院の外来・病棟といった大きなゾーンには、設計者とインテリアデザイナーによるデザイン会議の中で抽出した「岩手の3原色」をソーンカラーに採り入れた。監理段階での色の選定に際しては、岩手の地元で活躍されている色彩心理士の方をデザイン会議に招き、地元の人々の心に寄り添う色を厳選し、カフラスキームサイン計画に取り入れた。

照明シミュレーションにより
 サインを美しく「魅せる」
 照明環境を創出

「右手の3原色」として抽出した「西」「琥珀」「紫根」の3色をメインカラーにしたサイン計画とし、通常床材として用いる天然素材を原料としたリノリウムをサインの下地として使用した。

リノリウムのあざやかな発色を最大限活かすために、実際にサインとして使用するリノリウムと照明器具を用いて照度・色温度のパターンを変えてシミュレーションを行った。シミュレーションの結果、サインの地のリノリウムと白い文字を最も美しく「魅せる」照明計画を採用した。



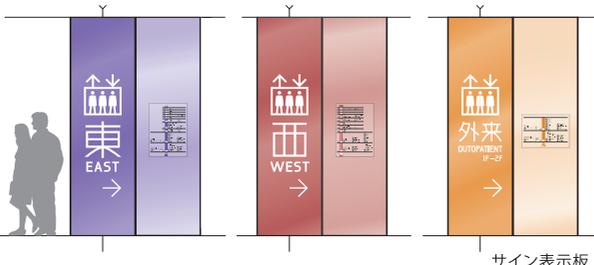
実際のリノリウムサンプルと照明器具を用いてシミュレーションを行った



シミュレーション結果を実際のサインと照明計画に反映



1F空・太陽のホールから見た廊下



サイン表示板



小児病棟廊下



山並みをイメージした
スタッフカウンター



病室の天井は青空をイメージした



障子パネルを用いた窓



眺望のよいデイルームには
電気式の暖炉を設置した



トクタヴェール外観



トクタヴェール内観

長期入院の子どもたちのこころ に寄り添う小児病棟

矢中新病院7階の小児病棟は、高度で専門的な治療を行う場所でありながら、子供たちがほっとできる空間を目指した。「廊下は絶対に治療行為が行われない場所。子供たちが心から安心できる場所としたい」という小児病棟の医師の想いを具現化すべく、岩手の自然から抽出した鮮やかな色のリノリウムが廊下を進むにつれて変化するデザインとした。各病室の入口も、廊下の色の変化に合わせてカラフルな色をつけ、自分の病室と認識できるようにしている。

安らぎの時間を創出する

緩和ケア病棟

緩和ケア病棟は、終末期の患者さんが直面する心身の苦痛に対して治療やケアを行う専門の場所であり、患者・ご家族が安心して身を預けられる場所でないければならない。矢中新病院10階の緩和ケア病棟は、残された時間を充実したものにできるように、自分の家のようにゆつくりとくつろいで過ごすことができる空間を目指した。患者が一番長く過ごす病室では、窓廻りに柔らかな光を感じることのできる障子パネルを用意し、光の移ろいと外の景色を感じることができるとしつらえとすることで、一日の流れをゆつくり感じることができると。

デイルームは、家のリビングにいるようなしつらえとし、キッチンで食事を作り、暖炉を囲みながら、患者・家族がゆったりとした時間を過ごせるようにした。

2300名の職員と地域住民の ためのフードコート店舗棟

1階にフードコートが入るアメニティ施設「トクタヴェール」が病院と同時に計画された。フードコートは24時間営業するコンビニエンスストアのほか、カフェやレストランなど、医大の職員、患者やその家族だけでなく、地域住民も自由に利用できる。

2階には職員専用のラウンジを設け、1階のフードコートで購入した食事を持ち込むこともできる。忙しい業務の合間を縫って、白衣などの仕事着のままでも患者やご家族の目を気にせずにご飯がとれるように、という大学側の配慮である。

白を基調とした軽快で明るい外観は、矢幅駅から続く大通りのにぎわいを創出する地域のシンボルとして人々の憩いの場となると同時に、まちの活性化に貢献していくことを目指した。

24時間稼働する病院を支える 木造保育園

新病院で働く職員が誰でも安心して子育てと仕事を両立できる環境をつくるため、同一敷地内に定員1001名の保育園が設置された。日勤だけでなく夜勤の看護師に対応すべく、夜間保育や休日保育、一時保育も可能な計画となっている。病児保育室を設け、子供の突然の病気により仕事を休まざるを得ないという問題の解決を図った。更に病院敷地内の利点を活かして院内小児科医との連携も図っている。

外装は杉の板貼りとし、自然の木の香りと手触りを感じることができる建物とした。保育室の壁や床にも天然木を用い、温かみのあるインテリア空間とした。

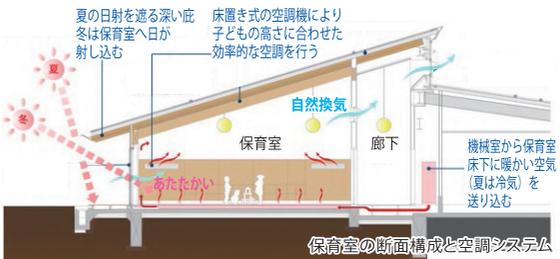
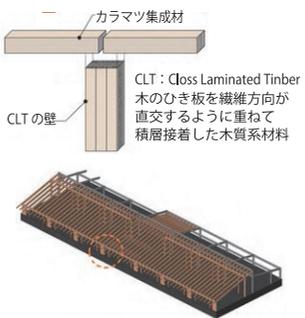
また、構造は地震に強い木と鉄骨のハイブリッド木構造とし、木質で剛性の高いCLTを壁柱として用いた。

厳しい冬の寒さに対し、保育室の低層空間を重点的に温められるように、暖気を床下に引き込み、冬場に木のフローリングを裸足で走り回ってもほんのりとあたたかく感じることができると。

「世界に冠たる病院」を目指して

施主、設計者、施工者が一丸となって、岩手の地に「世界に冠たる病院」をつくるという使命を帯び、設計期間12ヶ月、工事期間2年6ヶ月に及ぶ長期プロジェクトを遂行した。岩手の気候・風土に根差したデザインは、今後、病院として海外へ発信していく上で、大きなアピールポイントとなる。

(覆並・秋山・伊藤)



保育園外観



保育室



木造小屋組を見せたエントランスホール



越前焼の洗面器



設計者も参加した越前焼



ペンダント照明モックアップ



陰をデザインした客用廊下



天井、壁格子に永平寺の木を使用したお食事処



越前和紙(飾り棚壁)を使用した客室



深山幽谷をイメージした大浴場



木材のお宝さがし

木材は杉、松、銀杏など永平寺からの支給材です。どの材をどこに使うか何度も木材保管庫に足を運びながら吟味選定しました。また木材以外にも、越前瓦、越前焼、越前和紙、越前漆器を建物の随所に使用し、徹底的な地産地消により地域貢献を図りました。
(青木)

地産地消

日本人の美意識について論じた谷崎潤一郎の「陰翳礼賛」の思想のもと、玄関ホール、客室、廊下、大浴場などの内部空間は自然光の量をコントロールし、宿泊施設として必要な明るさを確保しながら、陰翳を生かした空間を目指しました。その実現のために照度シミュレーションや模型、モックアップによる検証を何度も行いながら進めました。

陰翳礼賛



永平寺川越しの夕景



青木 裕一	意匠設計	1982年入社
池内 匠	意匠設計	1995年入社
油野 球子	構造設計	2011年入社
早田 真由美	設備設計	1991年入社
祖父江 一仁	電気設計	1990年入社

EIHEIJI HAKUJUKAN
大本山永平寺「親禪の宿」柏樹閣

親禪の宿

柏樹閣は、福井県永平寺町、永平寺の三者が協力・連携して進める「永平寺門前の再構築プロジェクト」の環く永平寺が準聖地とする門前に建設する施設です。計画地は本山と一般社会の中間地帯にあり、一般参拝者や観光客が禅の心に触れることができ、永平寺境域に相応しい建築が求められました。担当者はコンベ段階から坐禅修行に励みながら取り組みました。

伝統美の継承

玄関棟は、永平寺大庫院のイメージを踏襲した木造建築としています。屋根廻りについては社寺建築と同様に現寸により外観の検証を行いました。

エントランスホールは、伝統的な木架構を見せた開放的な空間とし、空調設備や照明器具が出ないように模型やBIMによる検証を行いました。

禅の空間

建物の中にも山々の峰の色や谷川の響きを感じ取れることが「禅の空間」と考え、建築と自然の一体化を図りました。18室の客室はすべて永平寺川に面して設け、川のせせらぎや、山並みに触れることが出来るようにしました。また各所に永平寺の豊かな自然を体感できる禅の庭を設けました。



屋根廻り現寸検査

禅の心に触れる空間の実現に向けて
— 宿坊と旅館の中間の建築 —

歴史と文化を継承し、次世代へと生き続ける建築

— 『文化財価値の継承』と『社会的価値の向上』への取り組み —



福本 敦子 意匠設計 1992年入社
木村 誠 構造設計 1989年入社

NISHIARADAISHI SOUJI-TEMPLE
SANMON (MAIN GATE)
西新井大師総持寺 山門

関東有数の歴史ある古刹

西新井大師総持寺は、天長三年（八二六年）弘法大師空海によって開創されたと伝えられる関東で最も古い真言宗豊山派の寺院です。現在も檀信徒はもとより地域の人々の心の拠り所として常に賑わい親しまれており、足立区のシンボルの存在となっています。

今回改修工事を行った山門は、唯一江戸時代後期（天保四年／一八三三年）と推定されるに建立された総檜造りの楼門であり、区内随一の貴重な遺構として足立区指定有形文化財に指定されています。

時代に即した改修計画

平成二十三年の東日本大震災を契機に今後起こりうる大震災に備えて耐震診断および劣化調査を行い、その結果を受けて保存修理工事を行う運びとなりました。

保存修理は大きく、①文化財としての部材保存修理、②伝統木造架構そのものには手を加えずに耐震性能を向上、③現代の都市環境下における境内環境の改善、からなり今後の長期使用に耐える総合的な整備を実現しました。

文化財価値の継承

文化財保存修理では、その価値を後世に継承するため、現状維持を原則とし劣化調査に基づいた修理を行う方針としました。現況調査により建物の不同沈下や木部の腐朽等、破損劣化が各所に見られたことから、屋根銅板の葺き替え、木軸部の修理等の劣化修理を行いました。

修理方法は、曳家を行った後に上層を揚家しつつ下層の柱の劣化部分を交換する半解体修理としました。

耐震性の向上

楼門など、バランス的に屋根が重く、縦長なプロポーションの建物に最適な補強形式として『鉄骨内蔵型耐震構法』を

採用しました。今回は建物配置を移動したため、不同沈下対策としてRC造基礎を新設し、その上に山門を6m曳家して据えています。

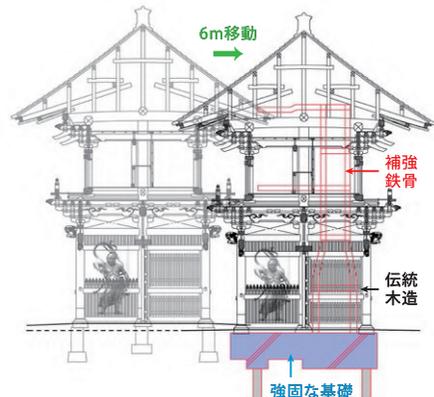
深い軒の出を支える伝統木造架構は自重に対して自立しているため部材の修理にとどめ、別架構の補強鉄骨を挿入して、これに全地震力を負担させました。木造と鉄骨とは独自の継手を新たに考案し小屋梁部分にて接合しました。この継手を上下の動きを許容するディテールとすることで、木材の長期クリープや季節変動、地震時の上下変形にも柔軟に対応して木造仕口と馴染むようにしました。また、鉄骨が古材に直接触れないように木製の枕部材を介在させているため、古材の腐食についての問題もクリアしています。

機能性の向上

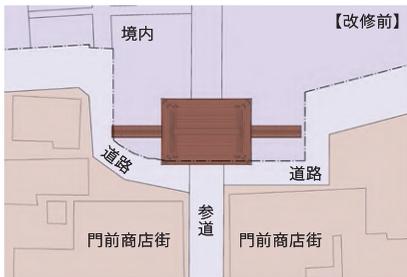
改修前は門前が狭く、大勢の参拝者に対してゆとりがない状況でした。江戸名所図会に見るような広々とした風格ある寺院の門構えを再現するべく、建物配置を境内側に6m移動して門前広場を設け、地域交流の活性化を図るとともに、混雑時の参拝者の通行の安全も確保することができました。竣工後、正月や縁日などの混雑時には大勢の参拝客が待ち合わせや屋台の飲食の場として活用し、賑わいを見せています。（福本）



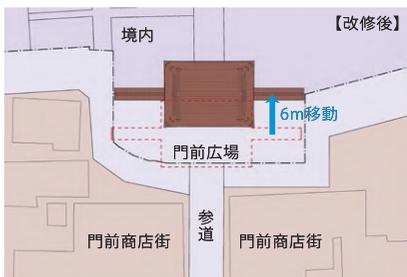
外観竣工写真



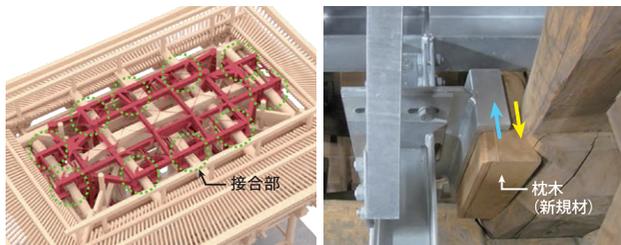
改修概要



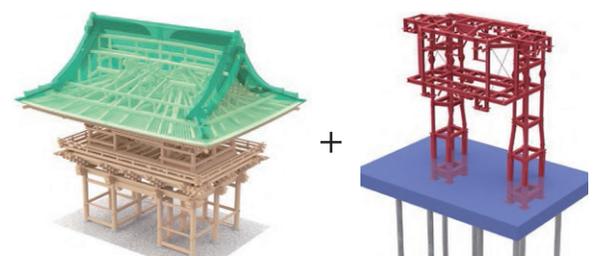
【改修前】



【改修後】



伝統木造を上下方向に拘束しない接合ディテール



礎石の上に自立する伝統木造 + 強固な基礎と一体の補強鉄骨 『鉄骨内蔵型耐震構法』



正月時に大勢の参拝者で賑う門前広場

高性能超精密巨大クリーンルームの実現

— 清水建設の半導体工場の集大成を目指して —



野村 啓一	意匠設計	1997年入社
小前 健太郎	構造設計	1996年入社
本多 延幸	意匠設計	2008年入社
小嶋 一輝	構造設計	2009年入社

KIOXIA IWATE FAB NO.510
キオクシア岩手 510 棟

フラッグシップ半導体工場

2000年代初頭、東芝様と当社は
大分工場を起点に、本格的な半導体工場
づくりに取り組んできました。半導体の
微細化と集積度がムーアの法則に従って
高まる中、要求される半導体スベック
はそのまま建物への要求性能へと置き
換わりました。代々の担当者は、その
スベックと格闘し、実現していく過程で、
設計技術の高度化を習得してきました。
東芝様から独立したキオクシア様の
北上工場はそのノウハウの集大成と
なっています。

クリーンルームの要求性能

- ・無柱空間の最大化
- ・製造エリアのクリーン確保
- ・地震時に製造装置が『壊れない』
- ・平常時に製造装置が『停止しない』
- ・超短工期

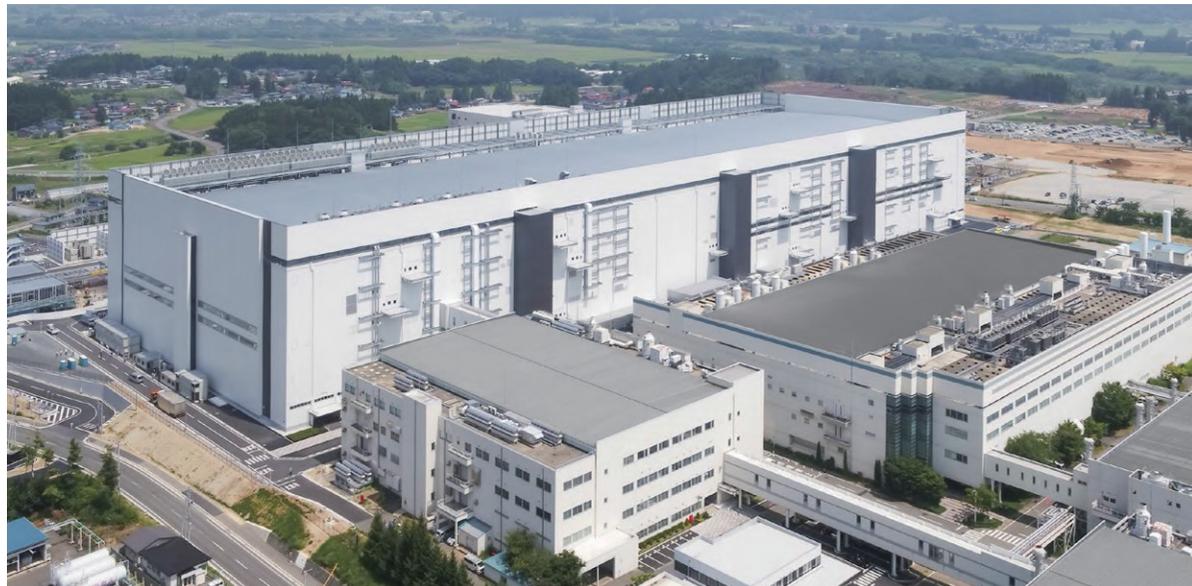
半導体工場のつくり込みは以上の5点
に集約されます。日本の製造業が重厚長
大型から、超精密・ハイテク型へ移行する
中、当社の生産施設設計も、大きな変化
を遂げてきました。

複層メガトラス

大分工場でプレキャストコンクリート
根太システムを有する単層の大スパン
クリーンルームを実現した後、より大きな
クリーンルーム面積確保の要望に応える
ため、四日市工場（現キオクシア社 230
棟）では、2004年に高剛性メガトラス
架構によるクリーンルームの複層化に
取り組みました。

3階の階高の全てを使ったメガトラス
架構により、2階クリーンルームの無柱
空間を確保しつつ、4階5階にもクリーン
ルームを設けることに成功しました。
それまで単層であった製造エリアの複層
に成功したことは、半導体工場として
先駆的な取り組みでした。

北上工場では、当社実績中、最大スパン
のメガトラス架構を実現しています。



天井チャンパー肉部

根太システム

マルチステップ免震

地組から吊られるメガトラス

マルチステップ免震

地震国日本では、どこに工場があっても
その影響を逃れることはできません。
生産施設も、阪神淡路大震災以降、免震化
を始めとした建物の地震に対する備え
は急速に高度化しました。

半導体製造装置は、非常に繊細であり、
中小地震でも内部損壊します。高剛な
製造装置の損壊の影響は大きく、建物を
免震化することが必須でした。

一方、免震化した場合、事務所などでは
問題視されない、風・微小な地震などに
より、製造装置が影響を受け停止する
可能性があります。一度停止した装置を
再び立ち上げるには、相当期間が必要で、
その間の損害も甚大です。

マルチステップ免震はこの相反する
要求性能を満足する免震システムとして
開発されました。複数の滑り支承を組み
合わせて、常時から大地震までの揺れを
制御するシステムは、四日市工場 240 棟
（2007年竣工）で初めてインストール
されました。今では、微振動対応の免震
生産施設の標準仕様となり、全国に9棟
70万㎡の実績を誇るまでになりました。

高剛性床組

クリーンルームの床組に要求される
微振動性能は、建築の次元とは異なる
11m単位のスベックです。大分工場が開発
したプレキャストコンクリート根太シス
テムは、その後、当社のスタンダードと
してノウハウが蓄積されていくことに
なります。

四日市工場 250 棟（2011年竣工）、
同 N 220 棟（2016年竣工）では、
かつて以上に床剛性の要求がアップし
ました。その解答として、鉄骨剛節梁を
井桁に設けたクロスギールシステムを
開発、必要性能を確保しました。北上工場
は、精緻なシミュレーションを繰り返して
検証する姿勢が決め手となって入手した
案件です。

四半世紀にわたり取組んできた技術
蓄積で、お客様の半導体製造に貢献して
きました。延面積 20万㎡の建物を 12ヶ月
で完成させる技術は、設計と施工の強力
なタッグの賜物でもあります。今後
もお客様のニーズに応え、それを超える
価値を提供していきます。



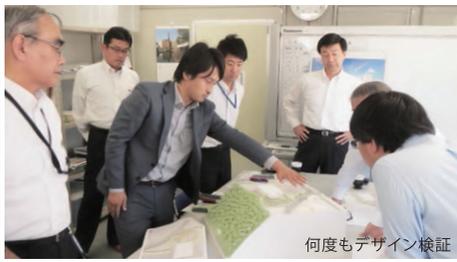
地域の魅力を発信していく滞在型の食品工場

— 地のものを活かした新しい観光拠点 —



福島 北斗	意匠設計	2009年入社
中島 仁志	意匠設計	1992年入社
東 加奈子	構造設計	2004年入社
椿 信孝	設備設計	1998年入社
古賀 雄貴	電気設計	2011年入社

NAGASAKI CASTELLA LAND
長崎カステラランド



何度もデザイン検証



敷地のコンテキスト【普賢岳・橋湾・段々畑】



エントランス



段々畑が連続する崖上100mの敷地

『ここだけ』の魅力

『ここから』発信

雲仙普賢岳の麓、地元名産品であるカステラ製造を行う店舗併設型の食品工場です。老朽化した工場・店舗の建替にあわせ普賢岳の山並や橋湾、段々畑など「ここだけの圧倒的な魅力を顕在化させ、多くのコラボレーターとともに」ここから地域の産業を発信できる新たな観光拠点を設計しました。

圧倒的な風景に視線を導く

初めて敷地を訪ねた時、旧工場・店舗が風景を塞ぐように建てられていました。建替にあたり「穏やかな橋湾や雲仙の山並」など圧倒的に美しい風景への導きを新しい施設の付加価値にしたいと考えました。

来訪者を迎える店舗は、長崎市と雲仙・島原を結ぶ観光道路に面する立地であり「人々を引込む興行き感」「重量感のある石積」「透明なガラス」「海の水平線を基調としたコンクリート屋根」により、美しい風景へ視線を導くシンプルなデザインを心掛けました。特徴的な軒は、耐久性が高く自然の風合いがある木毛セメント板で多面体をつくり、表情の変化を阻みました。実現にあたり模型・3D・モックアップにより検証を行い進み込みを行いました。

海・山・段々畑・カステラ

敷地は、周囲に広がる段々畑の最上部、崖上100mに立地しています。製造・販売までの作業効率化と、特殊な立地にあわせて建物構成が課題となりました。工場はボリュームを低く抑え景観の良い高台に大屋根のある店舗を配置しました。敷地の高低差を活かし製造工程を積層化し、レストラン・見学通路・トイレなど眺望の良い空間で工場とつながり、来訪者と生産動線を分離させつつ雄大な風景とカステラ工場がゆるやかにつながる空間を実現しました。

周辺環境との調和

「ここは田舎だから繊細なデザインだけでは客が寄り付かない」
外観の提案過程で施主より頂いた一言から、地のものを中心に周辺環境との調和について再考しました。地元出身の造園家と共同計画した外構は、敷地内転石で足元を形作り、普賢岳の植樹を中心に風景との連続性を持たせました。地域特有の風や強い日射対策もデザイン要素に加えました。風シミュレーションにより、建物を低く抑え、先端を絞ることで周辺へ強風の影響が無いよう配慮しました。中間期には、自然通風窓により内部に風を取込み環境負荷の低減を図りました。深い軒は、直射光を遮り、照り返し光を木毛セメント板により和らげる効果を狙いました。この地特有の厳しい環境をヒューマンスケールに和らげ、来訪者が魅力ある風景を最大限満喫できることを目指しました。
(福島)



周辺環境に呼応するランドスケープ



海の見えるトイレ



レストラン

戦略拠点としての新工場創出

—「魚沼だからできること」の追求—

戦略拠点としての工場

本案件は、長野県に本社を置くマルコム株式会社の新戦略拠点計画です。

客先は近年の米糴甘酒ブームにより甘酒の出荷調整を余儀なくされました。その米糴甘酒を始め、塩糴、醤油糴等の米糴製品安定供給の為、子会社である魚沼醸造を設立し、新潟県魚沼市に新工場を建設しました。コンベアから米糴製品の複雑な製造工程を調査、ヒアリングし、効率的な製造ラインを提案したことが評価され受注した案件です。また短工期内で計画を行い、客先希望時期に稼働開始を間に合わせるスケジュールも評価されました。

魚沼だからできること

戦略拠点としてショップや工場見学等のゲスト対応を行いたいという客先要望があり、「効率的な製造工場」と「魅力的なゲストエリア」の融合が求められる計画でした。豊かな水資源を有し、日本有数の米どころである魚沼を、客先県外初進出の場として選定したことに着眼し、「魚沼だからできること」を追求したゲストエリア創出を目指しました。

越後三山と向き合う

計画敷地は周囲に越後三山（八海山・駒ヶ岳・中ノ岳）を望み、すぐ脇には水無川が流れる自然豊かな立地です。工場を訪れたゲストは周囲の自然環境を感じ、その中で作られた米糴製品に触れる、そんなゲストホールを目指し計画しました。ゲスト対応の拠点となるゲストホールは眺望に配慮し2階に配置しました。また越後三山、水無川に面する2面に大型開口部を設けパノラマビューで周囲の自然を望める空間としています。

豪雪に耐える

魚沼市の設計用積雪量は3mであり、鉄骨数量が多くなるため、コストダウンの方策を模索しました。調査の結果、新潟県建築基準法施行細則により、一定の基準を満たした自然落雪屋根であれば設計容積雪量を1mに軽減できることがわかりました。計画初期段階より客先から「和モタンの外観」としたいという要望があったこともあり、客先のルーツともいえる「味噌蔵」をモチーフとした切妻勾配屋根を採用しました。3・5寸勾配の自然落雪屋根とすることで設計用積雪量を1mに軽減、コストダウンに寄与するとともに、周辺環境に調和する和モタンの外観デザインを実現しました。

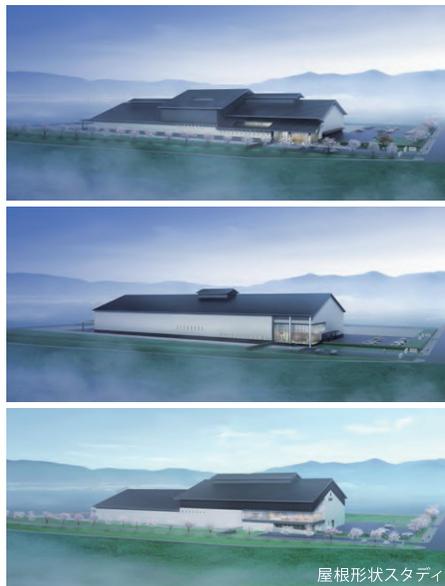
豪雪を活かす

魚沼では古来より「雪室」を天然の冷蔵庫として利用してきました。本工場ではゲストホールの空調熱源補助として雪室の冷気を利用することに挑戦しました。雪室の2階には見学用のデッキを設け、雪の冷気を体感することができると計画です。目で見るだけでなく、魚沼の自然を肌で感じるゲストエリアを実現しました。雪の側圧、断熱納まり、冷気ルート等綿密な検討を重ね、設計を進めました。

地域に愛される戦略拠点

近年主流となりつつあるゲスト対応工場。その中においても魚沼特有の自然環境との調和・融合、地場伝統技術である「雪室」の採用、ゲスト対応の方策等様々な挑戦を盛り込み、短期間で多くの協議・検討を重ねた「魚沼醸造 水の郷工場」が客先の新たな戦略拠点として、地域住民から愛され、客先の発展に寄与する施設になることを願っています。

(西田)



屋根形状スタディ



西田 浩之	意匠設計	2017年入社
野田 正太郎	意匠設計	2014年入社
北村 信之	電気設計	2005年入社
宮村 泰至	設備設計	2009年入社
稲垣 啓輔	構造設計	2011年入社
穂山 貴志	構造設計	2015年入社

UONUMAJOUZOU
MIZUNOSATO PLANT
魚沼醸造株式会社 水の郷工場

成長し続けるターミナルビルSC 国内初設計施工の実現
 — 国際空港のターミナルビルSC



日比野 加奈 意匠設計 2007年入社
 谷 晃洋 意匠設計 2015年入社
 杉浦 亜由美 設備設計 2008年入社
 吉田 圭祐 電気設計 2014年入社

CHUBU CENTRAIR INTERNATIONAL AIRPORT TERMINAL 2
 中部国際空港 第2ターミナル

空港ターミナルビルへの挑戦

中部国際空港(愛称:セントレア)の新旅客ターミナルビルとして、ローコストキャリア(LCC)向けのターミナルビルを1年7ヶ月で実施設計から竣工まで行いました。

LCCターミナルとして、コストを抑えながらも機能性を追求し、手荷物検査の簡略化や搭乗待合室やゲートなどを国内線・国際線に切り替えて使用するスイング対応などを実現することができました。

機能とローコストの両立

これまでの空港では、チェックインロビーで手荷物検査を受けることもありましたが、近年は検査を手荷物搬送ラインで行うことが増えています。

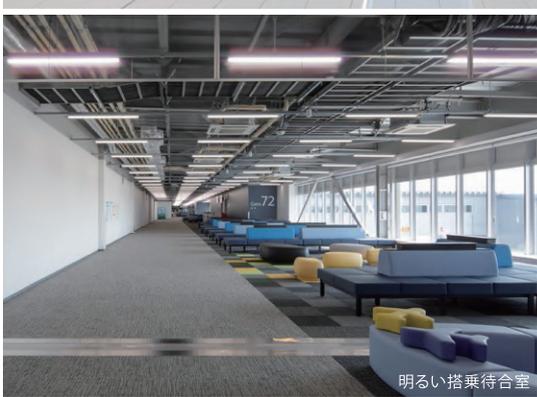
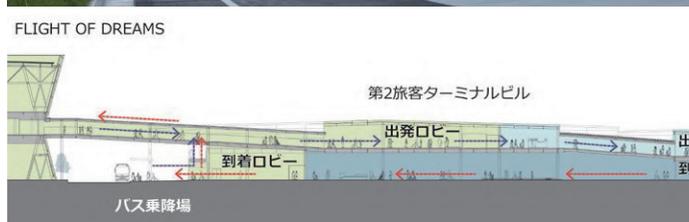
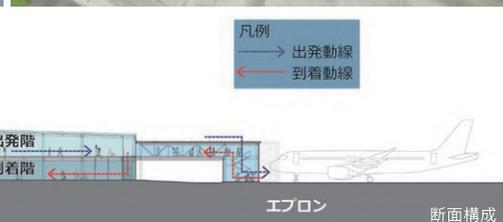
今回計画でも検査は手荷物搬送中に行うとともに、セルフバックドロップを実装しました。ローコスト実現のため、階高を極力低く設定しており、BIMを活用した検討により、狭いスペースの中で空調設備など手荷物搬送機器を納める工夫をしました。

セルフバックドロップについても、簡易型の機器を導入してコストを抑制しつつ、建築側で工夫を凝らして、空港施設として求められる高いセキュリティ水準を確保することができました。

歩くことが楽しい内装デザイン

全長約600mと長い旅客動線をなんとか楽しいものにできないか、試行錯誤を行っていました。内装の更新も視野に、設計段階ではシンプルなスケルトンを用意することで多様なデザインに対応できるプラットフォームを目指しました。

監理に入り、ゲンスフリー・アンド・アソシエイツ・インターナショナル・リミテッド(社)の内装基本デザインをもとに空港さんと打合を重ね、楽しい空間を実現しました。



機能のブラッシュアップ

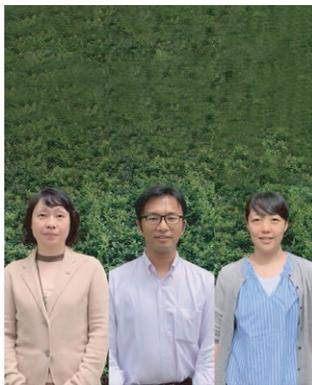
利便性・機能性の追求のため、設計段階・監理段階ともに絶えずスタディを行っていました。荷捌場の車両走行試験を行い、実際の使用者の意見をもとに使用性を向上させたり、飛行機乗り継ぎの機能を追加するために、プランの変更を行うなど、竣工までできる限りのブラッシュアップに注力しました。逼迫したスケジュールの中で、施主・現場・設計と一体となってよりよい空港を目指して邁進することができました。

成長の継続へ

当初計画時より、LCCターミナルの需要拡大を想定し、スポットの増築計画がありました。工事中より事務所エリア拡張のため、既存棟との接続計画がスタートするなど、更なるブラッシュアップが進んでいます。内装デザインの更新、さらなる機能の拡充など、今回の建築をプラットフォームとして成長し続けることを願っています。

『ランドスケープアーキテクチャー』で多様な価値をつなぐ

— 第二の大地の実現とZEB Readyの達成 —



宮崎 俊亮 意匠設計 2004年入社
中澤 綾 意匠設計 2005年入社
笠原 真紀子 設備設計 1990年入社

WASEDA UNIVERSITY
BUILDING 37
WASEDA ARENA
早稲田大学 37号館 早稲田アリーナ

早稲田アリーナは、多機能型スポーツアリーナを中心にラーニングcommons、スポーツミュージアム等を内包する複合施設です。

設計は、基本計画・基本設計を山下設計が行い、実施設計・工事監理を山下設計と当社の設計JVで行いました。また基本計画から工事監理まで一貫して、ランドスケープデザインにブレイスメディアが携わっています。

ランドスケープアーキテクチャー

早稲田アリーナの位置する戸山キャンパスは、1962年村野藤吾設計の校舎群が完成することで、現在の骨格がつくり出されました。周囲は、尾張藩徳川家の下屋敷や回遊式庭園「戸山山荘」としても利用された戸山公園、六八幡宮や放生寺等、歴史の痕跡が今も残されています。また広域的には、神田川流域沿いの肥後細川庭園や椿山荘を起点に、早稲田キャンパスを経由し、東京西部の緑が色濃く残る地域と都心を繋ぐ中継点に位置しています。

基本設計では、敷地周辺の時間経過や環境の変化を注意深く観察しながら、新たに建築をつくることでその意味を顕在化させ、歴史・人・地域・地球環境を繋ぎ合わせる「ランドスケープアーキテクチャー」を実現することが、早稲田大学の次世代のシンボルにふさわしい建築として考えられていました。

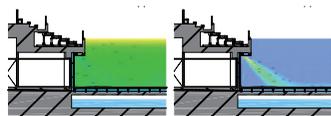
キャンパスの建蔽率制限に対応するため、地下にアリーナを埋設し、地上には「戸山の丘」と名付けた生物多様性に富み、また、新たなコミュニケーションやアクティビティを喚起する、生活環境に寄り添った自然環境を構築しています。ガラス大庇・低層棟・高層棟といった建築エレメントを建物のエッジに離散的に配置することで緩やかな領域を形成し、周辺地域と大学を繋ぎ合せています。エネルギー面では、地中熱を利用した空調システム等により早稲田大学施設として初のZEB Readyを達成しています。早稲田大学の次世代のシンボルにふさわしい



早稲田アリーナ全景、北東側より見る



高層棟
戸山の丘
低層棟
メインアリーナ
断面構成、建物が既存キャンパスの高低差を繋ぎ、回遊性を与えている



アリーナにおける温度と気流のシミュレーションによる検証



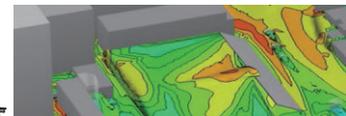
斜路部の排水検討スケッチ



透水型三角PC板モックアップ



高木部の断面構成検討



風シミュレーションによる検証



「戸山の丘」低層棟(東側)から高層棟(西側)を見る



メインアリーナ 大階段とガラス大庇

第二の大地「戸山の丘」

「戸山の丘」では、平均土厚約100mの第二の大地ともいえる環境を目指しています。

植栽する木々は雑木林のように多様な植物を混植しつつ、竣工直後から自然の風景をつくることを目的に、全ての高木を地下支柱で支えています。風シミュレーションを行い、発生する風を予測した上で高木の配置を決定しました。本計画では屋根への植栽を行っているため、アスファルト防水の水勾配があり、エリアごとで土厚が異なっています。そのため全ての高木において地中における断面構成を検証し、地下支柱の選定や地表レベルの設定等を行いました。

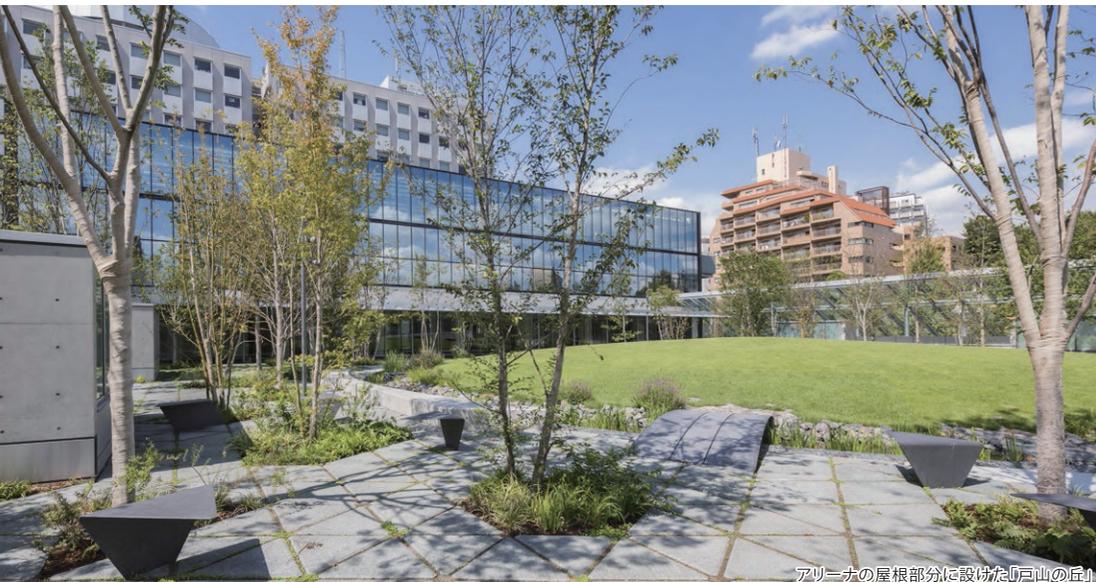
また3500mを超え、平均土厚約100cmの広大な屋上に降る雨は、屋上全体で水勾配を設定することにより、雨水貯留槽を介さず、直接放流を可能とし、公園のよつな自然排水を実現しました。

ZEB Readyの達成

建物の大半を地下に埋設するという計画特性を活かし、地中熱を利用した空調システムや太陽光発電等を組み合わせ、アリーナは一次エネルギー量を実質ゼロとする「ゼロエネルギーアリーナ」施設全体としてもZEB Readyを達成しています。

設計では、アリーナの機能特性に着目し、室内温度は下限を空気調和衛生工学会の屋内スポーツ施設的设计条件である最低温度13℃、上限を熱中症になりにくい28℃に設定する等、設計基準や運用基準の見直しを図りました。地下躯体を蓄熱体として、地中熱を建物に取り込み、通常時は空調設備に頼らなくても快適な環境が維持できる計画としています。

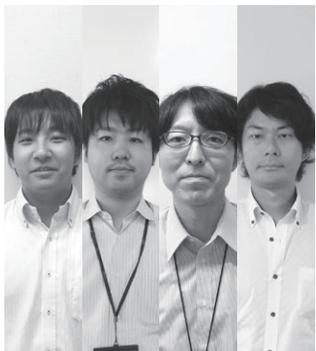
早稲田アリーナにおいて「ランドスケープアーキテクチャー」を実現できた経験を活かし、これからも新しい建築や環境づくりに携わっていきたくと考えています。



アリーナの屋根部分に設けた「戸山の丘」

秋田の新しいまちづくり／かおづくり

— 長い期間をかけた熱い議論。そして試しながら作り上げる —



内藤 純	意匠設計	2007年入社
平野 義之	意匠設計	2008年入社
鹿島 孝政	構造設計	2012年入社
成田 政杜	設備設計	2015年入社

AKITA BROADCASTING SYSTEM
 HEAD OFFICE
 秋田放送新社屋

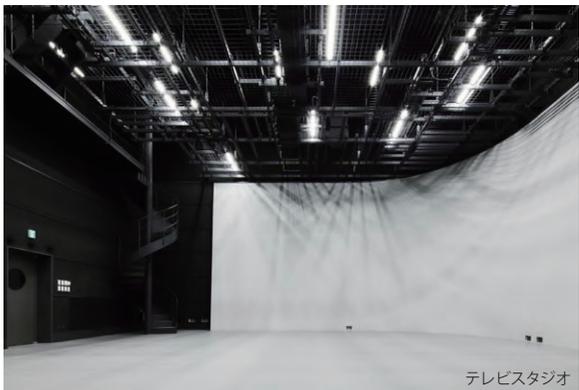


鉄塔のライトアップ

建物のライトアップをベデストリアンデッキから確認



左手に吹抜階段の窓



テレビスタジオ



編集室



ラジオスタジオ



プレイキングススポット



吹抜階段

本案件は、秋田の老舗放送局の駅前移転プロジェクトです。放送局の仕事はチームワークが最も重要であり、数多くのプロフェッショナルが議論を交わしながらベストな番組作りを行います。私たちは、2年以上の期間をかけて、それぞれの方々の密な打合せにより、ニーズを洗い出し、新たな課題やテーマを掘り起こしました。

駅前広場との調和・秋田らしさを表現

秋田市の抱える人口減少や若年層の流出という現状を把握しつつ、秋田駅前という立地に対して、どのような貢献できるかが一つの課題となりました。このテーマに対して、「秋田へようこそ」「ふるさとにお帰りなさい」のコンセプトを外観やエントランスに表現しました。

中央を貫くベデストリアンデッキを歩き交う人々に対し、秋田を象徴する風景となることを目指しました。特に夜が暗く寂しい駅前広場。秋田杉で作られたバス停とともに、秋田放送も光の演出をすることで、秋田の街と呼応することを考えました。秋田杉を使用したエントランス廻りの暖かな光・イベントなどに対応して色が変わえられる3階のハイサイドライト・ランドマークとなる鉄塔のライトアップが、秋田の駅前を彩ります。



中央にベデデッキ・写真下側がバス停・奥が秋田放送



秋田杉を使ったエントランスホール

「日本一コンパクトなラジオ」

このテーマは、打合せの中でお客様から頂いた言葉です。日本一コンパクトというのは、自分たちの身の丈に合ったスペースを無駄なく確保するということですが、一方で地域密着型の地方局を目指す秋田放送にとって、関係者のコミュニケーションスペースは不可欠でした。

新社屋は、既存の建物に比べ約7割の面積に縮小しました。無駄を省き、スペースを兼用していくことで、「コミュニケーションのきゅっかけづくりとしての活用を意図した、小さきまな窓により人々の活動が垣間見える吹抜階段や、ラジオスタジオと隣接したプレイキングススポットなどのスペースを捻出することができました。

思いを伝える場所をつくる

隔週の定例会には、毎回30名を超える人に参加いただきました。それぞれの立場を超えた熱い議論は、秋田県民に確かな情報をお伝えしたいという熱意が感じられ、いつも身の引き締まる思いでした。放送用配線のルートや機材の設置位置・コンセントの位置をミリ単位で決めていくなどの作業は、まるで住宅をつくっているようで、物事の進め方を含めてとても勉強になりました。

今後、放送機材を設置しそのトレーニング期間を経て新社屋での放送開始となります。2020年4月の新社屋での放送開始を楽しみにしています。(内藤)



施主と一緒につくり上げる臨場感

— 意匠設計よりプロジェクトを振り返る —



清水 達容	電気設計	2014年入社
巽 英明	構造設計	2007年入社
堀田 泰治	意匠設計	2010年入社
山本 昌芳	設備設計	2007年入社

SANNOHASHI HEAD OFFICE
サンノハシ本社

施主と作り上げる臨場感

本案件は、自動車のエンジン等に使用する特殊ネジを製作する株式会社サンノハシ様の百周年記念事業における本社建替えプロジェクトです。モノ造りに対して大変熱意のあり、デザインに造形の深いお施主様とお施主様サイドより参加された熊本のアトリエ建築家、大阪のグラフィックデザイナー事務所とコラボレーションしたプロジェクトです。毎回、設計定例では白熱した議論になり、施主含めチーム一丸となって本プロジェクトを作りあげました。

思いを貫き、柔軟に考える

入社7年目に関東支店に異動をし、初めてプロジェクトを通じてコンペ入手から竣工までを経験させて頂きました。それまでは大型案件を数人の意匠設計者、チームプレーで設計していたのに対して、支店では上職からの支援はあるものの、主担当として施主と協議し、現業と納まりコストを調整し、関係者と主体的に連絡を取り合っていく計画をまとめていきました。

本計画では、本社屋に相応しい建物になるよう、施主と様々なアイデアを出し合いました。コーポレートカラーのオレンジを使ったアクセント壁とサンノハシ様の主要製品であるネジを彷彿する螺旋階段、従業員が集中して打合ができる籠りの会議室、企業の歴史が刻まれたヒストリーウォールや寛ぎのスペースであるリラクゼーションエリア等々です。それらのアイデアを具現化すべくスケッチを描き、現業・メーカーと打合を重ねました。コストや時間的な制約も含め、ものづくりを体感する貴重な、楽しい経験でした。

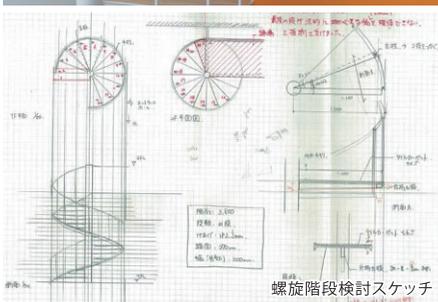
妥協を許さないお客様の熱意は同じモノ造りという共通力テコリーにおいて、大きな刺激と影響を受けました。思いを貫き、柔軟にまわりの意見に耳を傾ける大切さを学びました。



北側外観



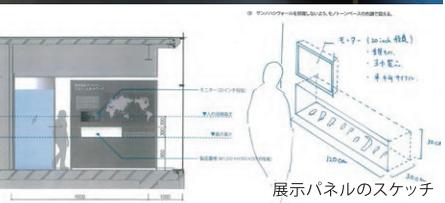
サンノハシウォール
と螺旋階段



螺旋階段検討スケッチ



籠りのスペース(中会議室)



展示パネルのスケッチ



籠りのスペース(中会議室)



リラクゼーションエリア



ヒストリーウォール



サイン計画

設計チーム・現業一丸に

なつてデザインする

本プロジェクトの一つの特徴は、現場を含め、主担当メンバーが若いことでした。結果として安定感のあるベテランよりも若いチームでやれたことで、逆に勢いのあるデザインができたと思います。決してスマートな道ではなかったですが、色々勉強にもなった貴重な経験となりました。

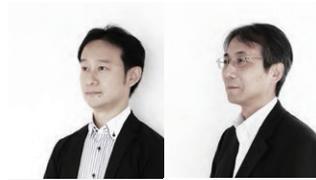
構造設計者とは、透明感のあるファサードを作るべく、吹抜の梁を無くすことやカーテンウォールの間柱との取合、繊細な螺旋階段のディテールなどの取合を考えました。構造との調整は、大きなデザインフレームに関わる一方、コストや品質、人の安全性や快適性に直に関わるので多角的な視点で、知恵を絞りました。

一方、設備電気の調整は、無意識にいかに行うことができるかです。どこから空調を吹き、吸い込むか、どうやって利用者が無意識に快適に感じるかができるを一緒に考えました。空調ダクトを造付の家具に潜ませたり、中会議室の掘り炬燵そのものを空調レタンとしたり。一見地味なことかもしれませんが、空間を快適に、そして綺麗に見せる上では、そういった小さなこだわりの積み重ねが重要であることを感じました。

中会議室やリラクゼーションエリアなどをフィールドフォオフェイスデザインとコラボレーションすることで、一層デザインを追求できたと思います。空間のイメージやコンセプトメイキングから素材や色味などの具体的な提案まで、一緒にものづくりをしていてワクワクしていました。例えば、籠りのスペースの窓を塞ぐ木パネルの開口は、ただ丸く開けているのではなく、後ろから45度のテーパーを付けています。そうすることで、このパネルが極限まで薄く見えます。この角度が30度でも60度でもダメだと製作間際まで言われたのも、取り付けてみて初めて分かりました。個人的に一番感動した瞬間でもありました。竣工間際には、施主が毎日のように足を運んでくださり、「お気に入りの空間です」との言葉を頂いたので印象的でした。(堀田)

農業の未来を担うオープンイノベーションラボ

— PM体制によるゼロからの施設づくり —



河島 淳 (右) 意匠設計 1994年入社
 田中 厚三 (左) 意匠設計 1998年入社
 笹崎 慎 (左下) 意匠設計 2004年入社
 大久保 敏之 (右下) 仕様設計 1992年入社

JA GROUP AGVENTURE LAB
 JAグループ アグベンチャーラボ

オープンイノベーション

アグベンチャーラボは、次世代に残る農業を育て、地域の暮らしに寄り添い、場所や人をつなぐをコンセプトに、JAグループの強みを活かした新たな事業創出、サービス開発、社会課題の解決を目指すイノベーションラボ施設として、大手町ビルのLABゾーンに開設されました。

ビジネスアイデアや先端技術を持つスタートアップ企業、協業や技術支援を行うパートナー企業、共同研究や創業支援などを行う行政・大学、人員・データ運営などを受け持つJAグループが連携し、新たなビジネスモデルを創出していきます。また、日本初となる第一次産業を対象としたコーポレートアクセラレーター「JAアクセラレータープログラム」が実施され、選考通過企業に対するメンタリングも行われます。

PM体制による施設づくり

プロジェクト開始時に、家具メーカーやオフィス設計事務所との競合による提案コンペが開催されました。情報鮮度の高さが重要な施設のため、コンペ開催からオープンまで半年という短期間で、計画から施工運用まで、二元的に提案・実現できることが求められました。

提案にあたって、設計の知見を持ち、コンセプト立案に深く関われるメンバーが各専門性の垣根を超え横断的に検討・提案することが、前例のない施設づくりにとって重要と考えました。そこで、建築・インテリア・空調衛生・電気・情報ICT・映像音響の専門家を有機的に束ね、最新の知見を引き出し、クライアントと一体となって施設を造りこんでいくPMプロジェクトマネジメント体制を提案しました。知識創造理論をベースにしたコンセプトと、空間造形と機能を融合させたインテリア提案あわせてご評価いただき、当社を選定いただきました。



ラボのシンボル「本棚ツリー」と、素足でリラックスできる「丘ラウンジ」



エントランスからライブラリーホールを望む



柔らかな仕切られた「ワーキングスペース」



大型映像が投影される「ライブラリーホール」(左手前) キッチンを備えた「ワークショップスペース」(右奥)



和室を模した「畳ミーティングコーナー」



「も・の・こ」のデザイン

プロジェクトスタート後は、クライアントとPMチームが丸になつて運用も見据えた施設のあるべき姿について、試行錯誤しました。

ラボの目標であるイノベーションの達成には、接点のなかつた点と点(人と人)が新たに繋がり、試行錯誤を繰り返しながら開発を進めるアジャイル型開発が必要とされています。この施設でも日頃の研究開発やイベントを通して偶発的な出会いや気づきを誘発させ、オープンイノベーションを促進させる仕掛けづくりが重要であると考えました。そこで、ラボ内での活動をイメージし、建築やインテリアの枠を超えて様々な仕掛けについてアイデア検討を行いました。

「自然」と「Tech」の融合

イノベーションを生み出す柔らかなコミュニケーションの仕掛けとして、空間を完全に仕切らず、メンバー同士が互いに気配を感じられる空間構成としました。「自然」と「Tech」の融合をテーマに、木やグリーン、曲線を用いるとともに、映像や光の演出によるスタジオのような場としました。また、各コミュニケーションエリアの目的にあわせて、家具什器・情報ICT・映像音響・インテリアのトータルで提案・検証を行い、設計施工で造りこみを行いました。結果、約20社にも及ぶ家具や機器を導入し、最適な空間機能づくりをおこないました。

今後、これらの様々な仕掛けが、メンバーとラボの成長・変化を促し、日本の農業の革新的な発展に寄与できることを期待しています。



デジタルデータで製作した「本棚パーテーション」

『水の光』の体験をつくる

—日本とは、ジャカルタとは、企業らしきとは—



FIELD FOUR DESIGN OFFICE
島田 雄太 意匠設計 2011年入社

TOTO INDONESIA HEAD OFFICE
TOTOインドネシア本社

ジャカルタでの挑戦

TOTOインドネシアは日系と現地企業の合弁会社であり、その新本社兼ショールームのデザイン提案を日本のインテリアデザイン事務所である我々が行った。

いままで我々が担当する案件は、海外進出する日系企業ばかりであったが、TOTOインドネシアは日系と現地企業の合弁会社であり、デザインディレクションはインドネシアのみで行われている。

「水の光」の体験をつくる

TOTOインドネシア新本社兼ショールームはジャカルタの中心地に位置し、低層フロア（2-5F）をカスタマー・設計者を対象としたショールーム機能とし、高層フロア（6-15F）を本社オフィス機能とする構成となっている。ショールームフロアにおいては、強烈な光と、成長著しい都市の喧騒の中に「水の光」の体験を目指す。TOTOのC-プールをイメージさせる「都市を映す水の光」のエントランス、各ショールーム階をつなぐエスカレーター壁面の「流れる水の光」、ショールームの「静寂な池の水」等、清涼な水が生み出す豊かな生活体験を想起する場を「水の光」を意識しながら目指した。高層フロアでは、清涼な水が持つ反射や透過を用いた上質な執務エリアを企業イメージの具現として表現した。

背景をつくる

ショールーム空間として、あくまでもその場に展示されるプロダクトそのものが主役であり、空間や建築が背景となるような工夫として、東南アジア特有の強い外光のコントロール、華美な装飾の排除を目指した。それとともに、ショールームのエリアの間である移動空間に、水を扱うこの会社独自の空間体験をつくり、訪れた方々の印象に残る空間をつくることを心掛けた。

日本らしき、海外でできること

国内でできることと海外でしかできないこと、日本らしさをローカルの材料で実現することの難しさを改めて実感した。また、インドネシアならではの加工や素材に出会い取り入れることが非常にエキサイティングなプロセスとなった。

(島田)



両側にモニターを配したエスカレーターホール



役員会議室



2F デジタルセンター



役員フロアロビー



ショールーム



ショールーム

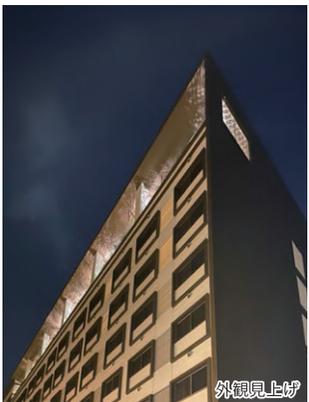
異国の地で日本と変わらぬ暮らしを実現

— 現地駐在の体験をモノづくりという形に —



高橋 兎一 意匠設計 2009年入社
 ヴィザ ティスタマラ 意匠設計 2011年入社
 西村 由妃 構造設計 2015年入社

ISORAS CIKARANG
 イソラス チカラン



外観見上げ



1階車寄せ

7階建て214室＋付帯設備で構成される本案件は、インドネシア・ジャカルタ東部の工業団地エリア「チカラン」地区に立地するホテルとアパート双方の機能を合わせた単身赴任者向けのサービスアパートです。本施設は、海外では当社初の単独投資開発事業であり、オペレーターである藤田観光様の海外事業における新ブランド「ISORAS」の第1号店となります。

住む人の立場で語り、創ること

2016年7月に企画がスタートした時、インドネシアに赴任して1年半が過ぎ、実際に滞在し感じたこと、想ったことを形にできた本案件はとても貴重な体験でした。打合せでは現地に赴任しているメンバーで幾度となく顔を突き合わせ、海外ではマンションデベロッパーが多数参入しているサービスアパート事業で、ホスピタリティ産業が介入することにより提供できるものは何か、日本と変わらぬ暮らしを海外で実現するために必要な要素とは何かを各々の実体験やニーズを元に施設の骨子を創り上げました。

モノづくりへの昇華

施設の骨子をもとに客室レイアウト、配置計画、施設構成の検討過程で、予算管理に悪戦苦闘しました。各客室タイプの検討を幾度となく重ね、タイプごとの試算を行い、建物形状は整形で地階のないシンプルな形とすることで、計画はモノづくりへと一歩を踏み出しました。建物の配置は前面道路からの構え、道路越しにある貯水池への眺望に配慮し、間口を可能な限り広く確保しました。施設構成は1階を住居者、訪問者が自由に行き来できるレセプションエリアとし、直接アクセスできるテナントスペースを奥に配置し、2～7階は中廊下型の客室配列とし、付帯施設を7階に集約することで内部からの眺望に配慮しました。



2～7階 共用廊下：壁面 雲パネル



1階エントランスロビー：欄間 雲パネル



7階共用廊下：欄間 雲パネル



1階レセプション：砂岩、天然木の採用

外から内へ、内から外へ

外装はオーナ所掌として弊社のデザイン、インテリアデザインはオペレーターである藤田観光様のインテリアデザイナーが主体となりお互いの思いを形にし各々のデザインが織りなす相乗効果で施設全体に一体感が生まれるよう注力しました。

外装デザインはユニットで見せるデザインを大きなフレームでやさしく包み込み、チカランに広がる空と大地のトーンカラーで彩り安心して過ごせる施設の顔づくりを意識しました。

インテリアデザインは現地の天然素材、ナチュラルカラーを基調とし、安らぎが感じられる空間を演出しています。施設の随所にちりばめられている「雲パネル」はISORASブランドのコンセプトである「見上げる空は変わっても、いつもと同じ暮らし」を象徴するデザインとしてモックアップを何度も製作し、協議を重ね完成しました。

海外でのモノづくりの楽しさ・難しさ

国際支店に配属になり早7年が経ちました。今回は商業施設の設計・監理を担当しましたが、この7年間で東南アジア、欧州、北米など様々な国で車体工場、医療機器工場などの生産施設、国内大手銀行の内装設計を担当し海外でのモノづくりの楽しさ・難しさを体験してきました。国ごとに法規も違えば工法も違い、日本で当たり前に行えることが海外では当たり前でないことは多々ありました。

異文化に触れ、文化の違いを超えて、よりよいモノづくりを行うにはどうしたらよいかといった問題のクリアに、現地ではできない・モノがないからと言って目指すイメージを妥協するのではなく、現地の設計担当、現場担当と実際のモノを見て触れて確認し、創意工夫・開拓を行うことで出来上がっていく、モノづくりの醍醐味を日本にいるよりも身近に味わってきたのではないかと思います。

これまでの体験を今後のプロジェクトでも活かし、海外でのモノづくりの挑戦を続けていきたいと思えます。(高橋)



7階大浴場：内風呂、露天風呂



客室内観：Superior Room

まちとつながる庁舎をつくる

— 地域の特性をかたちにする —



柿澤 英之	意匠設計	1996年入社
水田 博夫	意匠設計	2011年入社
田邊 学	構造設計	2008年入社
堤 裕樹	設備設計	2011年入社
中野 信哉	電気設計	1993年入社

YASUDA-CHO
TOWN HALL PROJECT
安田町新庁舎建設事業

安田町の新しいシンボル

既存庁舎の老朽化に伴う町役場の新築移転事業です。町は新庁舎建設の基本理念を「まちづくりの拠点、まちのシンボルとなる庁舎であること」「町民にとって便利で使いやすく、親しみのある庁舎であること」「安全・安心で防災拠点となる庁舎であること」と定め、設計施工プロポーザルを行いました。

私たちは、自然に恵まれた高知県安田町という土地のイメージ、山裾の不整形な敷地形状、安田町のまちとの連続性を手がかりに提案に臨みました。

庁舎を通り抜ける新しい道

計画地の北側は安田小学校、南西には安田八幡宮があり、周辺は住宅地に囲まれています。新庁舎内には役場機能のほかに郵便局・JAの窓口があり、それらの中央に新しい「まち」となるモール状の空間をつくることで、庁舎が目的の地になるだけでなく小学生の通学路や井戸端会議の場所になるなど、町民の方々と親しみやすい場所になることを目指しました。

新しい道となるモールの待合スペースは「やすだモール」、南側エントランスの多目的スペースは「やすだリビング」、北側エントランス横の食堂兼休憩室は「やすだサロン」と名付け、「やすだモール」を中心に人々の居場所を配置しています。

大きな屋根と柔らかなイメージ

この地方には「土佐派」と呼ばれる建築様式があります。台風の影響が大きいためと思われませんが、矩形の平面と切妻屋根で構成された質実剛健なイメージ、漆喰の白い外壁と瓦屋根、雨水から外壁を守る水切瓦、地覆には地面からの汚れ対策となる石張りや板張りの仕上が特徴として見られます。これらを用いた提案は各社が行うと予想されたのでそれを超えた提案をしようと思いました。

安田町の風景に馴染み、まちのシンボル



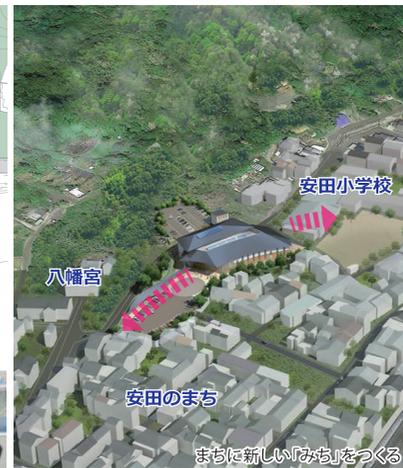
3D検討



初期のイメージスケッチ



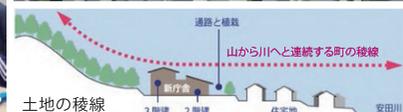
まちとの連続性



八幡宮

安田のまち

まちに新しい「まち」をつくる



土地の稜線

3階建 2階建

住宅地

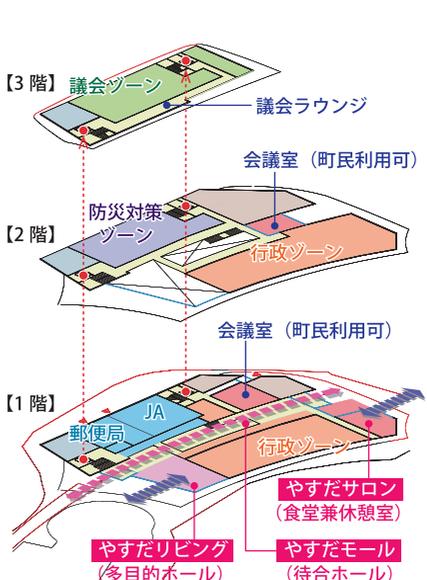
山から川へと連続する町の稜線



小学生とのワークショップ



小学生とのワークショップ



[3階] 議会ゾーン

[2階] 防災対策ゾーン

[1階] 郵便局

みんなに好かれる 庁舎になるために

より住民に近い存在の庁舎になるために、設計段階から複数のワークショップを行いました。安田町の各課や議場を巡る、小中学生を対象に、新しい庁舎に求めるものやこれから行いたいイベントなどを考えました。引き続き、施工中のワークショップも計画しており、町民の方々から興味を持っていただきたいと思えます。

この新しい庁舎が安田町の方々の新しい賑わいの拠点になることを目指し、竣工に向けてさらに努力してまいります。

(水田)



外観パース



議場



やすだモール

***1 他社協働**
渋谷ソラスタ
 プロジェクトマネージャー：東急不動産株式会社
 設計監修：株式会社日建設
 設計・監理：清水建設・東急設計コンサルタント設計共同企業体
かみず防災アリーナ
 設計：梓設計・清水建設共同企業体
 監理：株式会社梓設計
 グラフィック・サインデザイン：株式会社 OK デザイン室
 家具デザイン：岩沢兄弟
 照明デザイン：ばんぼり光環境計画株式会社
 インナーランドスケープデザイン：古谷デザイン株式会社
 コミュニケーションデザイン：株式会社 studio-L

ANA インターコンチネンタル別府リゾート&スパ
 建築プロデュース：株式会社フリアクス
 インテリアデザイナー（バリエーション・スイート室）：有限会社橋本紀夫デザインスタジオ
 インテリアデザイナー（一般客室、客室前廊下）：JPA デザイン(シンガポール)
 照明デザイナー：有限会社スタイルマテック
 温泉スパ・コンサルタント：テルマリウム株式会社
 厨房コンサルタント：株式会社ブルーコンサルタント
 サイン・コンサルタント：アトリエ景株式会社
浦和明の星女子中学・高等学校 カフェテリア棟
 構造監修(実驗委託)：東京大学大学院 福山正弘

日本女子大学図書館
 基本設計：株式会社妹島和世建築設計事務所
 実施設計・監理：妹島和世建築設計事務所・清水建設設計共同企業体
島津製作所 W10 号館 ヘルスケア R&D センター
 設計：NTT ファシリティーズ・清水建設設計共同企業体
岩手医科大学附属病院
 設計・監理：日建設・清水建設設計監理共同企業体
西新井大師総持寺 山門
 設計・監理：清水建設・建文共同企業体
キオクシア岩手 510 棟
 設計・監理：株式会社東芝
 設計・監理支援：清水建設株式会社
長崎カステラランド
 官庁対応協力：株式会社建社設計
 店舗・レストラン内装：デザインスペース アナザー・ワン
 植栽・庭園：株式会社石原和幸デザイン研究所

中部国際空港 第2ターミナル
 基本設計：株式会社グレンサー
 内装基本デザイン：グレンサー・アンド・アソシエイツ・インターナショナル・リミテッド
早稲田大学 37号館 早稲田アリーナ
 基本計画、基本設計：株式会社山下設計
 実施設計・監理：山下設計・清水建設設計共同企業体
 ランドスケープデザイン：株式会社プレイスメディア
秋田放送新屋
 CMr：株式会社山下 PMC
TOTO インドネシア本社
 建築設計：AIRMAS ASRI ARCHITECT
 構造設計：INDO SWISSATAMA
 設備設計：MEINHARDT INDONESIA
イソラス チカラ
 内装基本デザイン：株式会社安井建築設計事務所・マスタート株式会社
安田町新庁舎建設事業
 設計・監理：清水建設・若竹まちづくり研究所建設事業共同企業体

***2 インテリアデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス**
***3 ランドスケープデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス**

TOTO インドネシア本社^{*1}



建築主：PT. SURYA TOTO INDONESIA Tbk.
 主要用途：ショールーム・事務所
 敷地面積：3,730 m²
 建築面積：1,350 m²
 延床面積：20,250 m²
 構造：RC造
 規模：地上15階・地下4階
 竣工年：2018年
 所在地：Jl. Letjen S. Parman No. Kav. 81, RT.4/RW.9, Kota Bambu Sel. Kec. Palmerah, Kota Jakarta Barat, Daerah Khusus Ibukota Jakarta 11140

イソラス チカラ^{*1}



建築主：清水建設株式会社投資開発部
 現地法人 KEDUAPILAR DEVELOPMENT INDONESIA
 主要用途：サービスアパート・物販店舗・飲食店
 敷地面積：5,267 m²
 建築面積：1,973 m²
 延床面積：12,012 m²
 構造：RC造
 規模：地上7階
 竣工年：2019年
 所在地：Jl. Kemang Boulevard Kav.07, Lippo Cikarang Bekasi 17550, Indonesia

東急メガクニンガンプロジェクト^{*2,3}



建築主：東急不動産インドネシア
 主要用途：集合住宅・サービスアパート・商業
 敷地面積：9,865m²
 建築面積：3,914m²
 延床面積：122,089m²
 構造：RC造
 規模：地上44階・地下1階・塔屋1階
 竣工年：2022年
 所在地：Jl. Guru Mughni, Kuningan, Jakarta Selatan

安田町新庁舎建設事業^{*1}



建築主：安田町(庁舎)
 主要用途：事務所(庁舎)
 敷地面積：4,204.34m²
 建築面積：1,691.22m²
 延床面積：3,104.48m²
 構造：RC造
 規模：地上3階
 竣工年：2020年
 所在地：高知県安芸郡安田町大字やすだ1850他

JAグループ アグベンチャーラボ^{*2}



建築主：一般社団法人 AgVenture Lab(JAグループ8団体 共同運営)
 主要用途：事務所(オープン・バージョン)施設
 敷地面積：約1,245 m²
 延床面積：約1,093.21m²
 構造：S造
 規模：地上2階
 竣工年：2019年
 所在地：東京都千代田区大手町1丁目6-1 大手町ビル9F

中部国際空港 第2ターミナル^{*1}



建築主：中部国際空港株式会社
 主要用途：空港施設
 敷地面積：4,733,277.03m²
 建築面積：28,725.25m²
 延床面積：44,636.42m²
 構造：S造
 規模：地上2階
 竣工年：2019年
 所在地：愛知県常滑市セントレア

早稲田大学 37号館 早稲田アリーナ^{*1}



建築主：早稲田大学
 主要用途：大学
 敷地面積：33,362.24m²(キャンパス全体)
 建築面積：5,485.66m²(今回計画部分)
 延床面積：14,028.37m²(今回計画部分)
 構造：SRC造・S造・RC造
 規模：地上4階・地下2階
 竣工年：2018年
 所在地：東京都新宿区戸山1-24-1

秋田放送新屋^{*1}



建築主：株式会社秋田放送
 主要用途：放送局
 敷地面積：4,933.61m²
 建築面積：1,951.56m²
 延床面積：4,963.69m²
 構造：S造
 規模：地上3階
 竣工年：2019年
 所在地：秋田県秋田市中通7-1-1-2

サンノハシ本社^{*2}



建築主：株式会社サンノハシ
 主要用途：事務所
 敷地面積：992.54m²
 建築面積：1,691.22m²
 延床面積：1,093.21m²
 構造：S造
 規模：地上2階
 竣工年：2018年
 所在地：埼玉県八潮市大字大曾根1264

JAグループ アグベンチャーラボ^{*2}



建築主：一般社団法人 AgVenture Lab(JAグループ8団体 共同運営)
 主要用途：事務所(オープン・バージョン)施設
 敷地面積：約1,245 m²
 延床面積：約1,093.21m²
 構造：S造
 規模：地上2階
 竣工年：2019年
 所在地：東京都千代田区大手町1丁目6-1 大手町ビル9F

***1 他社協働**
永平寺回廊
 建築設計：SURYA TOTO INDONESIA Tbk.
 構造設計：INDO SWISSATAMA
 設備設計：MEINHARDT INDONESIA
魚沼醸造株式会社 水の郷工場
 建築主：魚沼醸造株式会社
 主要用途：工場
 敷地面積：146,920.29m²
 延床面積：1,092.96m²
 構造：RC造
 規模：地上3階
 竣工年：2019年
 所在地：新潟県魚沼市愛野町愛津字展望台25864

日本女子大学図書館
 基本設計：株式会社妹島和世建築設計事務所
 実施設計・監理：妹島和世建築設計事務所・清水建設設計共同企業体
東急島津製作所 W10号館ヘルスケアR&Dセンター
 設計：NTT ファシリティーズ・清水建設設計共同企業体
岩手医科大学附属病院
 設計・監理：日建設・清水建設設計監理共同企業体
西新井大師総持寺 山門
 設計・監理：清水建設・建文共同企業体
キオクシア岩手 510 棟
 設計・監理：株式会社東芝
 設計・監理支援：清水建設株式会社
長崎カステラランド
 官庁対応協力：株式会社建社設計
 店舗・レストラン内装：デザインスペース アナザー・ワン
 植栽・庭園：株式会社石原和幸デザイン研究所

東急島津製作所 W10号館ヘルスケアR&Dセンター^{*1}



建築主：東急不動産
 主要用途：集合住宅・サービスアパート・商業
 敷地面積：9,865m²
 建築面積：3,914m²
 延床面積：122,089m²
 構造：RC造
 規模：地上44階・地下1階・塔屋1階
 竣工年：2022年
 所在地：東京都台東区西新井1-15-1

長崎カステラランド^{*1}



官庁対応協力：株式会社建社設計
 店舗・レストラン内装：デザインスペース アナザー・ワン
 植栽・庭園：株式会社石原和幸デザイン研究所
 主要用途：事務所(庁舎)
 敷地面積：4,204.34m²
 建築面積：1,691.22m²
 延床面積：3,104.48m²
 構造：RC造
 規模：地上3階
 竣工年：2020年
 所在地：高知県安芸郡安田町大字やすだ1850他

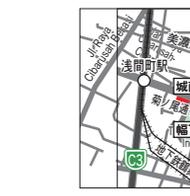
TOTO インドネシア本社
 建築設計：AIRMAS ASRI ARCHITECT
 構造設計：INDO SWISSATAMA
 設備設計：MEINHARDT INDONESIA
イソラス チカラ
 内装基本デザイン：株式会社安井建築設計事務所・マスタート株式会社
安田町新庁舎建設事業
 設計・監理：清水建設・若竹まちづくり研究所建設事業共同企業体

東急島津製作所 W10号館ヘルスケアR&Dセンター^{*1}



建築主：東急不動産
 主要用途：集合住宅・サービスアパート・商業
 敷地面積：9,865m²
 建築面積：3,914m²
 延床面積：122,089m²
 構造：RC造
 規模：地上44階・地下1階・塔屋1階
 竣工年：2022年
 所在地：東京都台東区西新井1-15-1

東急島津製作所 W10号館ヘルスケアR&Dセンター^{*1}



建築主：東急不動産
 主要用途：集合住宅・サービスアパート・商業
 敷地面積：9,865m²
 建築面積：3,914m²
 延床面積：122,089m²
 構造：RC造
 規模：地上44階・地下1階・塔屋1階
 竣工年：2022年
 所在地：東京都台東区西新井1-15-1

東急島津製作所 W10号館ヘルスケアR&Dセンター^{*1}



建築主：東急不動産
 主要用途：集合住宅・サービスアパート・商業
 敷地面積：9,865m²
 建築面積：3,914m²
 延床面積：122,089m²
 構造：RC造
 規模：地上44階・地下1階・塔屋1階
 竣工年：2022年
 所在地：東京都台東区西新井1-15-1

安田町新庁舎建設事業^{*1}



建築主：安田町(庁舎)
 主要用途：事務所(庁舎)
 敷地面積：4,204.34m²
 建築面積：1,691.22m²
 延床面積：3,104.48m²
 構造：RC造
 規模：地上3階
 竣工年：2020年
 所在地：高知県安芸郡安田町大字やすだ1850他

岩手医科大学附属病院^{*1,2}



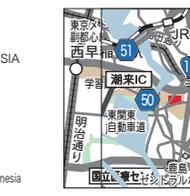
建築主：学校法人岩手医科大学
 主要用途：病院・保育所
 敷地面積：146,920.29m²
 延床面積：1,092.96m²
 構造：RC造
 規模：地上3階
 竣工年：2019年
 所在地：岩手県紫波郡矢野町大字藤沢1丁目1-1

中部国際空港 第2ターミナル^{*1}



建築主：中部国際空港株式会社
 主要用途：空港施設
 敷地面積：4,733,277.03m²
 建築面積：28,725.25m²
 延床面積：44,636.42m²
 構造：S造
 規模：地上2階
 竣工年：2019年
 所在地：愛知県常滑市セントレア

早稲田大学 37号館 早稲田アリーナ^{*1}



建築主：早稲田大学
 主要用途：大学
 敷地面積：33,362.24m²(キャンパス全体)
 建築面積：5,485.66m²(今回計画部分)
 延床面積：14,028.37m²(今回計画部分)
 構造：SRC造・S造・RC造
 規模：地上4階・地下2階
 竣工年：2018年
 所在地：東京都新宿区戸山1-24-1

秋田放送新屋^{*1}



建築主：株式会社秋田放送
 主要用途：放送局
 敷地面積：4,933.61m²
 建築面積：1,951.56m²
 延床面積：4,963.69m²
 構造：S造
 規模：地上3階
 竣工年：2019年
 所在地：秋田県秋田市中通7-1-1-2

安田町新庁舎建設事業^{*1}



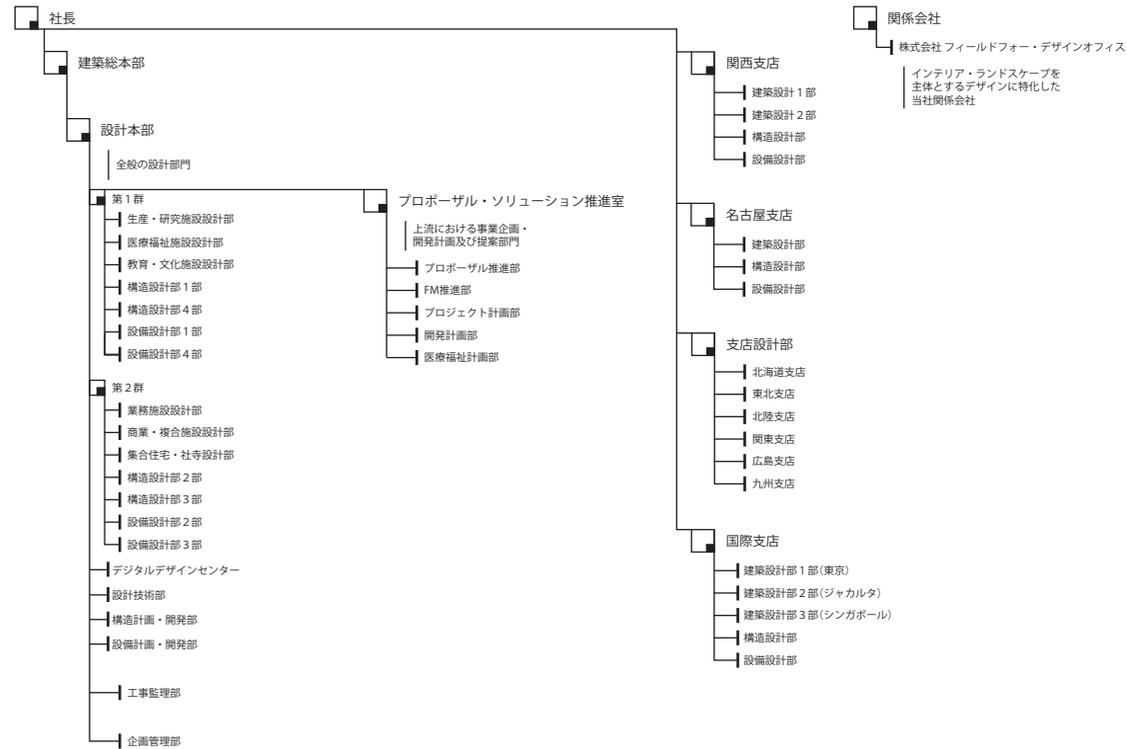
建築主：安田町(庁舎)
 主要用途：事務所(庁舎)
 敷地面積：4,204.34m²
 建築面積：1,691.22m²
 延床面積：3,104.48m²
 構造：RC造
 規模：地上3階
 竣工年：2020年
 所在地：高知県安芸郡安田町大字やすだ1850他

岩手医科大学附属病院^{*1,2}



建築主：学校法人岩手医科大学
 主要用途：病院・保育所
 敷地面積：146,920.29m²
 延床面積：1,092.96m²
 構造：RC造
 規模：地上3階
 竣工年：2019年
 所在地：岩手県紫波郡矢野町大字藤沢1丁目1-1

全国設計・プロポーザル系組織図 (2019.9月現在)



発行日 2019年12月
 編集・発行 清水建設株式会社
 /設計本部
 〒104-8370 中央区京橋2-16-1
 03-3561-1111(代)
 編集事務局 設計本部
 企画管理部
 印刷所 (株)ピーディーシステム
 年1回発行予定

非売品

委員長 大橋 一智
 副委員長 根岸 健一
 委員 兵藤 功治
 竹中 祐人
 柏木 元気
 吉沢 彬成
 根ヶ山 愛子
 大内 逸平
 坪内 舞子
 佐野 穂高
 服部 勇樹
 都築 弘政
 高下 晴臣
 早川 昇
 進藤 正人
 西田 浩之
 野村 綾子
 加藤 直樹
 福地 佑介
 河野 亮太
 伊藤 和陽
 根岸 悟史
 榊 竜太
 事務局 小島 哲

stream DEW

「潮流=ストリーム(stream)の源流は雫(DEW)にある」。
 「個々人の創造性発露が社員相互の啓発・情報共有の源であり、それが大きな流れとなる」という意味をこめて、2007年に命名。

